
王様と喪女

舘野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様と喪女

【Nコード】

N0653BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

只野はるか、27歳事務員。漫画を描くことと、預金通帳の残高を見ることだけが生きがいの非モテ女。

そんな彼女が大事な原稿を抱えてジャージ姿でいきなり落ちた先は、なぜか異世界の王様の婚礼契約書の上だった。

怒り心頭の王様は、責任をとって結婚しろとはるかに迫るが……？

001 喪女の身の上

——よし、これが打ち終わったら、すぐに家に直帰するぞ。
わたしはそう心に堅く決めて、主任に頼まれた文書を普段の二割り増しくらいの速度で、パソコンのキーボードを叩いていた。

わたしは只野はるか、二十七歳。職業は製造業の事務員。

……そんなわたしの印象は、とても地味だ。

ファンデを薄く塗り、リキッド口紅を軽くつけたのみの化粧は、よく言えばナチュラルメイク。

一応手入れはしているけど、眉も描いていないという手抜きぶり。髪の毛もうねるくせつ毛を簡単に一つにまとめたただけだ。

それに、会社の事務服があか抜けない水色のだぼつとしたものだというのも、わたしの地味さを更に強調していた。

だけど、わたしは作業員のおばちゃん達相手に、巻き髪したり、つけまつけバチバチしたりする趣味はない。

そんな支度する暇があつたら、趣味が睡眠に当てたい。

そんなわけで、わたしはとつても垢抜けなかった。

ただ、わたしに特筆するべきことがあるとすれば、大きすぎる胸くらいだろう。これだけは、みんなに褒められる。

わたしにしてみれば、肩は凝るし、太って見られるし、服選びは大変だしであまりいいことはないんだけどね。

「只野さん。仕事あがったら、みんなで飲みに行かない？」

「あ……、ごめんなさい。今日は用があつて無理なんです。すみません」

ちょうど金曜日の仕事上がり前ということもあつて、会社の営業の相田さんという女性から誘いを受けたけれど、気乗りのしないわたしはせっかくのお誘いを断ってしまった。……本当は大した用は

ないんだけどね。

「只野さん、付き合い悪いよー」

「本当にごめんなさい」

相田さんは冗談めかして言うてくるけど、たぶん内心では気を悪くしているだろう。

この飲み会、本当はただの飲み会じゃなくて、実際のところわたしと取引先の結構お偉いさんを引き合わせるための場であることをわたしは知っている。

「あの子もこんな機会でもなきゃ、彼氏もできないんだから。それにあちらともこれからいい付き合いができるかもしれないしね」
うっかりというか、ラッキーというか、わたしが給湯室でお茶を淹れている時に、そのドアの前で相田さんが同じ営業の人に話しているのを聞いてしまったのだ。

なんでも、その取引先の人わたしはわたしの胸が大きいのが気に入ったらしい。

……とすると、うちの会社に訪ねてくる度にわたしの胸のことを「相変わらず大きいねえ」とセクハラ発言してくるあの人だろうか。

……うん、やっぱり会いたくない。

会社のためなら、会った方がいいのかもしれないけど、接待とか苦手だし。わたしにはお茶出しとかがせいぜいだ。

それに、お酒の席とかでごまかされて、胸とか触られたら最悪だし。

おまけに、男慣れしていないわたしが取引先の人にうまく対応できるとも思えない。

「なんだ、このつまらない女は」

なんて思われたら、ちよっと、いやかなりへこむかもしれない。それでもって、もしかしたら円滑だった今までの取引先との仲も悪くなるかもしれない。

……いや、これは最悪の事態を想像しただけだけどさ。

でも、相田さんのわたしへの心証は多少悪くなるかもしれないけ

れど、それは仕事の方で挽回することにしよう。

わたしは渋る相田さんに謝り倒してなんとか飲み会は回避することに成功した。

「そんなんだから彼氏もできないのよ」

相田さんに嫌みを言われたけれど、わたしは気にしないことにした。

これは何度もいろんな人に言われていることだったからだ。

確かにわたしには恋人はいない。というかこの歳まで彼氏がいたことはない。

いわゆるもてない女——喪女というやつだ。

顔自体はそこまで悪くはない……と思う。

ものすごいブスでもなければ、美人でもない。ごく普通の顔。

もちろん、この歳になるまでに恋人が出来る機会が全くないことはなかった。

今までに異性を紹介してくる相田さんみたいな人もいたし、知り合いや親に婚活を勧められたりした。

でも、わたしにはめんどくさい男女の関係よりも、もっと大事なことがあったのだ。

「よし、下描きまでは完成ーっ」と

わたしはあの後、主任に文書を確認してもらってOKが出たところで、脇目もふらず家に直帰した。

趣味の漫画の下描きが予定したところまで終わりそうだったからだ。

その時のわたしは作成中のオリジナル漫画の進行具合が大変よろしかったので、その事に浮かれ気味だった。

これなら早めにサイトに載せられそうだし、気の乗らない飲み会

よりは、時間の過ごし方としてはやっぱりこっちのほうが有意義だ。今は騎士と姫君の恋物語を描いていて、そこそこ見てくれる人もいるので、わたしはそれが嬉しくて頑張ってサイトを更新していた。でもどこかの出版社に投稿する気はさらさらなかった。そんな自信もなかったし、ウェブ経由でいろいろな人に見てもらえるということにわたしは満足していた。……それは完全に自己満足っていうものかもしれないけどね。

「しかし、さすがに肩こったなー」

ジャージ姿のわたしは、自分の部屋でこきこきと首を鳴らしながら独り言を言う。いい加減、この癖は改めなければと思うが、長年の癖なのでなかなか抜けない。

わたしは今度のサイト更新分の下描きまで終わった原稿と漫画道具一式を百均で買ってきたプラスチック容器にまとめると、本棚兼物置に置きに行く。

この後の予定では、わたしのもう一つの趣味の預金通帳の残高を見て一人で悦に入る予定だった。……まあ、あんまり他人に見せられるような趣味じゃないよね。

預金通帳を見て、ニヤニヤする様は自分でも不気味かもしれないと思う。

しかし、その予定に反して、汚部屋に積み上げた漫画本の角に足の小指がぶつかり、わたしは見事に前につんのめった。

「いつてえ〜っ!」

二十七の女の叫び声として、これはどうかと思うが、本当に痛いのではない。

人間、とつさの時にはつい地が出てしまうものだ。

だが、原稿一式は死守。

どうあっても、死守。

足の小指の痛みをこらえながら、わたしは転ぶのだけはどうか持ちこたえて、その場に座り込んだ。

しかし、そんなわたしの目の前を何枚もの紙が舞っている。

……あれ、原稿用紙は封筒にしまつてあるし、あんなふうに散らばることはないはずなのに。

「……おい」

わたしが舞い落ちる紙に見とれていると、なぜかいきなり横から男に声をかけられて、わたしは思わず後ずさるうとした。……がなんだこれ。

「おい、やめろ！」

なぜかいかにも高価そうな馬鹿でかい机の上にいたわたしは、目の前の男に取り押さえられて呆然とする。

——どこだ、ここは。

さっきまでわたしは自分の汚部屋にいたはず。

だけど、今いるのは異国情緒溢れる豪華絢爛な広い室内。

そしてわたしを取り押さえているのは、浅黒い肌に銀髪の、深い青色の瞳をした美形。

「おまえ……、なんてことをしてくれたんだ」

美形がその秀麗な顔を歪ませて見てくるけど、こっちはそれどころじゃなかった。

——いつたい、なに？　なにが起こったの？

汚部屋から豪華絢爛な室内に一瞬にして移動してくるなんてあり

えない。

それに、目の前の絶対日本人じゃない顔立ちの男。

……これはもしかして、ひょっとしてひょっとすると、SFとかで言うのなら海外とかにテレポート？

もし、ファンタジーならウェブ小説とかでよくある異世界トリックプってやつですか！？

002 無茶な要求

高価そうな馬鹿でかい机の上からとりあえず降ろされたわたしは、目の前の美形に尋問された。

「おまえは誰だ。どうやら移動魔法で現れたようだが、どこから来た」

移動魔法とか言われても、よく分からない。

美形から魔法って言葉が出たってことは、やっぱりこれはファンタジーで、異世界トリップってことなんだろうか？

わたしが言葉を失っていると、美形は「答えろ」と厳しく言ってきた。

目の前の美形は威厳があつてとても偉そうだ。

……どうやらわたしは不法侵入者っぽいし、ここはおとなしく質問に答えた方がいいのかもしれない。

「……只野はるかです。日本から来ました」

「タダノハルカ？ ニッポン？ どこだそれは」

日本で通じないとしたら、じゃあ、これでどうだ。さすがにこれは通じるだろ。……ここがわたしが危惧したとおり異世界じゃなければだけど。

「産業が工業中心の島国です。ジャパンとも呼ばれています」

「……ジャパン？ 島国？」

美形男は首を捻ってる。それでも通じないのか。

やっぱりここは、考えたくないけど異世界なんだろうか？

「……恐れながら」

今まで気がつかなかったけど、近くには五十代くらいのおじさんがいた。その人が言葉を発する。

「この方は、異世界召喚された方では？」

「しかし、異国の者には見えるが、言葉が通じるぞ」

「ニッポンという国名に聞き覚えがあります。……確かガルディアの最強の女魔術師がその国の出身だったかと」

わたしはおじさんのその言葉に、今の状況も忘れてぼかんとしてしまった。

……そうすると、その最強の女魔術師って、日本人なの？

「……そうか。異世界召喚だというなら、こつも自然に言葉が通じるのは疑問だったが、かの魔術師なら納得できるな」

美形が得心したように頷いた後、ガルディアに問い合わせなければなと呟いた。

「……あの、普通は言葉が通じないものなんですか？」

異世界では言語が共通とかはないんだろうか。

「それはそうだろう。……おまえはまったく行ったことのない大陸で話を通じるのか？」

それが、あまりにも当然の言葉だったので、わたしは納得してしまった。

アメリカに行って、日本語が通じないのと一緒に。

まあ、稀にハワイとかグアムみたいな観光地の例もあるけど、でもそれは特殊な例で、一般的には他的大陸で日本語は通じない。

「言われてみれば、そうですね」

……でも、なんで召喚されたのがわたし？

こんな枯れた地味女じゃなくて、もつと若くて可愛い女子高生とか召喚すればいいじゃない。

「……しかし、召喚されてきたのは分かったが、おまえはとんでもないことをしてくれたな」

「はい！？」

美形に呻くようにして言われたので、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまった。

「おまえは届いた婚礼契約書を滅茶苦茶にしてくれたぞ。あとは署名するだけだったのに、どうしてくれる」

「どうしてくれるって……、再発行してもらえばいいだけでは？」

なんだか嫌な予感をじわじわ感じながらもわたしは答える。

「あれは他国からの書簡だ。そんなものをまた発行してもらうわけにはいかん」

美形にそう言われて、わたしは自分のしたことの重大さに血の気が引く思いだった。

「す、す、すみません！」

これって、わたしがこの人の婚礼を駄目にしちゃったってことだよな。

わたしは頭を下げて美形に謝ったけど、こんなことでは許してもらえないだろうな。どうしよう。

ちろりと美形を覗くと、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……仕方ない」

美形がそう言ったことで、わたしは許してもらえたのかと思って頭を上げた。

「おまえが代わりに俺の花嫁になれ」

「えええ、嫌ですよ！」

わたしは思ってもいなかった彼の言葉に、飛び上がって拒絶する。今まで男とは無縁の生活をしていたのに、いきなり花嫁になれてなんなんだ！

「俺だって嫌だ。しかし、契約より先に婚礼が決まっていたことにしなければ先方に言い訳できん」

「でも、なんでわたしなんですか！？ 花嫁にするならもつと若くて綺麗な人がいるでしょう！？」

この人がせつば詰まっていることは感じられたけど、やっぱり納得できないよ。

こんな美形なら、地位もありそうだし、女の子もよりどりみどりそうなのに。

「無理矢理そうすることもできるが、いきなり訳も分からず俺の花嫁にされる姫が気の毒だ」

はい？ この人今、姫って言った？

姫って、貴族とか王族の女の人だよね？

……そんな人を花嫁に出来る目の前のこの美形はいつたい何者なんだ。

「姫って……、あなたの身分はいつたいなんなんですか？」

「俺は、ザクトアリア国王、カレヴィだ」

「。ルビー？」

なんとなくポテチが食べたくなってくる名前だな。ちなみにわたしはコンソメ派だ。

わたしは目の前の緊迫した状況を一瞬忘れて、とぼけたことを思う。

「違う。カ・レ・ヴィだ」

すると美形が律儀にゆっくりと発音してくれる。

なんだ、某お菓子メーカーと同じ名前じゃないのか。紛らわしい名前だな。

「……って、国王なんですか！？」

「……おまえ、驚くのが遅いぞ」

カレヴィ王が呆れたように溜息をついたけど、わたしはそんなこと気にしていられなかった。

だって、したらわたしは一国の王の花嫁になれって言われてるってことじゃない！

だとすると、わたしは国王の結婚を駄目にしたってこと！？

是非とも彼との結婚は拒否したいけど、なんといっても相手は王様。決定権はむこうにある。

下手したら不敬罪で投獄されちゃったり、最悪の場合、国家同士の繋がりのお金を駄目にしたってことで、極刑に処されたりするかもしれない。

あああ、まだ死ぬのは嫌だ。死にたくない。

今描いている漫画もまだ完結していないのに。

それなのに、なんでよりによってわたしはそんな人の結婚を滅茶苦茶にしちゃったんだよーっ！

003 とりあえず着替える

「お願いです。どうか殺さないでください」

「……俺は、なにもそんなことは一言も言っていないぞ」

わたしが王様に必死になって頼むと、彼は啞然とした顔になった。

……あれ、違うの？

いや、だってさ。

わたしはこの婚礼の契約で生まれるはずだった国と国の利益をぶち壊したんだから、展開的にはその場で殺されてもおかしくない立場だ。

だったら、全くその可能性がないとは言えないじゃない。

「でもわたし、大事な契約書を駄目にしてしまったし」

「だから、おまえが代わりに俺の花嫁になれと言っているだろうが」

わたしの言葉に対して、カレヴィ王は面倒くさそうに答えた。

いや、でもそれはいくらなんでも投げやりすぎない？

こんな地味で、政略的価値もないわたしを花嫁になんて、きっと

国民も納得しないよ。

「国王の花嫁なんてわたしには無理ですって！」

それにわたしには王妃にふさわしい気品もなにもない。むしろが

さつという言葉がふさわしい。

わたしは必死で訴えたけど、カレヴィ王の反応は冷たかった。

「無理でもやれ。自分のしたことの責任は取れ」

「えええええ……」

わたしは情けない顔でカレヴィ王を見る。

一般庶民のわたしには、王様の伴侶なんて重すぎる。

それにわたしは美人でもなんでもないし。

わたしが困り果てて、近くにいたおじさんとカレヴィ王の顔を見回してたら、王様におもむろに言われた。

「とりあえず、タダノハルカ」

「あ、名前ははるかです。名字が只野で」

わたしが説明すると、カレヴィ王は納得したように頷いた。

「そうか分かった、ハルカ」

そして、カレヴィ王がわたしのよれよれのジャージ姿を見下ろして一言。

「その格好を今すぐどうにかしろ」

王様にどうにかしろと言われて、わたしはとりあえずこちらの衣装に着替えることになった。

それに当たって、わたしはお風呂に入れてもらうことになってしまった。

そしたら侍女の一人に大事に持っていた原稿一式を奪われて、わたしはちよつと気が動転してしまった。

「そつ、それ、すごく大事なものだから、絶対捨てないで！ ぜつたい、絶対だよ！！」

「か、かしこまりました」

侍女達はどん引きしていたけれど、間違えて捨てられでもしたら困る。

とりあえず、原稿の安全だけは確保したわけだけど、次にはわたしが侍女達に身ぐるみ剥がされるといふピンチが待ち受けていた。

「おとなしくお湯に浸かられてくださいませ」

年甲斐もなく少々暴れてしまったものだから、年かさの侍女から呆れたように言われてしまった。

……まあ、着るものがなければ、素直にそうするしかないし、わたしは半ば自棄になって一個目の湯船に浸かった。

湯殿を見渡すと、泡風呂とか薬草風呂とかあるみたい。

ちよつとした温泉施設だね。

侍女達は湯船に浸かっておとなしくなつたわたしに安堵の溜息をついていた。

……おかしいなあ。そんなに暴れたつもりはないんだけど。

そして、泡風呂へ移動すると彼女達は一斉にわたしの体を洗い始めた。

「えええつ、ちょっと、ちょっと！」

自分の体ぐらい自分で洗えますってと主張したが、侍女達には聞き届けてもらえず、わたしは体の隅々まで彼女達に洗われてしまった。

……なんというかちょっと犯された気分。ほとんどが若い女の子達だけだ。

シャワーで全身に付いた泡を落とされて、今度はわたしは薬草風呂というか、ハーブ風呂に連れて行かれた。

ハーブ風呂はラベンダーが主体らしく、リラックスできるようないい匂いがしていた。ついでに浴槽にバラの花びらも浮いていた。

わたしに似合わねええと思ったが、口に出すと無粋なのでやめておく。うん、賢明だ。

そんなこんなでお風呂から上がったら、侍女の一人に台の上へ横になってくださいと言われて、すでにやけくそになっていたわたしはその通りにする。

そこで、いい匂いのするオイルを擦り込みながらの全身マッサージを受けた。

あー、肩と首のこりがちよつと酷いんだよね、と言ったらそこを重点的にマッサージしてくれた。うへへ、極楽極楽。

さっきまでの羞恥もどこへやらで、わたしはご満悦になる。

そうしている間にも、他の侍女達がムダ毛の処理とか、手足の爪

磨きとかしてくれた。

一度も行ったことないけど、エステってこんなのかなあ。

まあ、たまにはこんな体験もいいよね。なんといってもタダだし。……ここが異世界ってんじゃないなら、もつといいんだけどね。

「それにしても、大きいのに形のよい素敵なお胸ですのね」

侍女の一人が感心したように言う。

うん、その点だけはみんなに褒められるよ。ありがとう。

「それに色白で、肌のきめも細やかで素晴らしいですわ」

まあ、日本人としては確かに白い方だけど、ここには白人の侍女もいるし、これはお世辞だろうなあ。

それに、肌のきめ云々はわたしにはよく分からない。みんなこんなものじゃないの？

全身マッサージも終わって、ちよつと休憩と言うことで、出されたジュースを飲んでいたら、侍女達はキラキラした素材の衣装をいくつか出してきて、わたしは思わず噴き出しそうになってしまった。まさかと思うけど、それをわたしが着るのか？

もうちよつと地味な素材はないの？　せめて着る人に衣装は合わせて欲しい。

キラキラはやめて、キラキラは、と主張したけど、どうやらこれしかないらしい。ちえつ。

しかも、そのどれも胸元露わで、体の線を強調した衣装だった。

……つか、これを着るのか？　普段だらけだった生活をしているこのわたしが？

逃げ出したかったが、なんといつてもわたしは裸。なのでそうするわけにもいかず、おとなしくわたしは侍女達にキラキラした衣装を着せられた。

お腹周りとか心配だったけど、それはなんとか帯を巻いてしのい

だ。

衣装のスカート部分はくるぶしまでだけど、これが脚にまわりついて非常に歩きにくい。

で、足には編み上げサンダル。

ここの気候は少々暑いみたいでこれが基本だそうだ。

そして丹念に化粧をされて、わたしの支度は終了。

「まあっ、ハルカ様、とってもお美しいですわー」

「ありがとう」

侍女達が褒めてくれたけど、目の前の鏡で自分の姿を確認したわたしは、特に舞い上がりもせずに冷静だった。

確かに三割増しくらいで綺麗にはなっている。

さっきのよれよれのジャージ姿からしたら別人だろう。

だがしかし、元が平凡なわたしだ。

うん、やっぱり普通は普通だよねー。

わたしはそのことにむしろ安心しながらも、侍女達に先導されてまたカレヴィ王の前に連れて行かれた。

004 超非凡な友人

着替えさせられたわたしは、さつきカレヴィ王がいた部屋へ戻らされた。侍女が言うにはそこは王の執務室らしい。

入室すると、そこに見知った人物がいたのでわたしはびっくりした。

だって彼女がここにいるはずない。思わずわたしは自分の目を疑った。

着ているのはドレスだし、ものすごく綺麗になっているけど、でもやっぱり間違いない。

「ち、千花っ！？」

「はるか、ひさしぶりー。元気だったー？」

幼なじみの千花に抱きつかれてわたしはちよつと呆然とする。

千花とは小さい頃からの友達だけど、こんなことは聞いてない。まさに青天の霹靂だ。

「げ、元気、元気だけどー……なんで、ここに千花がいるの？」

今は確か、結婚して外国にいるって聞いてたんだけど。

「あれ、最強の女魔術師が日本人だって聞いてなかった？」

「聞いてたけど……まさか、それが千花だっていうの？」

友達が異世界で魔術師なんて、そんな馬鹿なことがあるの？

「うん、そのまさか」

「うつそ、そんなことありなの？」

千花、いつの間にそんなことになったんだ。

「うん、まあ……。驚くのも無理はないと思うけどー……」

千花はそう言うと、困ったように頬に手をやった。なんとというか、どこことなく気品のある仕草だ。

「……なんだ、知り合いだったのか？」

久しぶりのわたし達の再会を遠巻きにして見ていた王様が声をかけてきた。

「知り合いつていうか……友達です」

「久しぶりにはるかに会いたいなと思つたら、召喚の座標指定を少し失敗してしまいました。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

千花はわたしから離れると、カレヴィ王とおじさんに頭を下げる。
「いやいや、ティカ様が頭など下げないでください。あなた様にそんなことをされたら我々がガルディアに睨まれてしまいます」

おじさんがどこなくにやけた顔で、それでも慌てて言う。……

まあ、千花は友達の鼻肩目を引いてもとっても美人なだけだね。

「……それにしてもなんでティカって呼ばれてるの？ 千花でしょ？」

綺麗な響きだけど、やっぱり聞き慣れないせいか違和感がある。

「うん、この大陸の人には千花って発音しにくいらしいんだよね。だからティカって呼ばれてるの」

そうなんだ。それなら納得。

それにしても友達が最強の女魔術師って呼ばれてるってすごくない？

「それにしても、千花、魔法使えるなんてすごいね。わたしにも使えるかな？」

わたしがわくわくしながら聞くと、千花はちょっと困った顔をした。

「うーん、はるかにはあまり魔力がないから、あかりを灯す魔法ぐらいしか使えないと思う」

「えー、そうなんだ。残念」

最強と言われる千花がそう言うんだから、事実なんだろう。

でもあかりくらいは灯せるんなら、それを教わってもいいよね。

向こうの世界ではそれでも珍しいことだもの。

「……話に割り込むが少しいいか？」

カレヴィ王が遠慮がちにわたし達の話の腰を折った。

「はい、どうぞ」

千花は相手が王様だっというのに堂々としている。
ひょっとして、最強と言われるほどの魔術師だと、いろいろな国の王族と対等に渡りあえるんだろうか。

さっきのおじさんもいやに腰を低くして『ティカ様』って呼んでいたし。

——すごい。すごいよ、千花。

わたしなんか、王様と向き合うのでさえ、命の危険まで感じて内心冷や汗ものだったのに。

千花のこの肝の据わり方はマジでただ者じゃないよ。

「ハル力が突然現れたことで、隣国のディアルスタン王国の王女との婚礼契約書が滅茶苦茶になった。最強の魔術師の力でどうにかならないか」

あ、そうだった。

千花がどうにか出来るならわたしのしたことは不問になるよね。

そしたら、王様と結婚しなくてもいいし。

「そうですね、婚礼契約書はどうにもなりません、ディアルスタンと話を付けることは出来ますよ。この場合、この婚礼はなしということになります」

「ああ、それでもいい。だが、国内に相手の名までは伏せてあるが、近々婚礼を挙げることは知らせてしまっている。どうしたらいい」
ええ、そんなにせっぱ詰まっているの？

だから、わたしを代役にしようとしたんだ。

「そうですね……」

千花は顎に指を当てて難しい顔をして考え込む。

その次に、千花の爆弾発言が投下された。

「はるかには申し訳ないですけど、このままあなたの花嫁になつてもらうことになりますね」

「ああ、それでいい」

えええええっ!?

カレヴィ王は簡単に頷いてるけど、ちょっと待ってよ、わたしはそんなこと納得してない！

わたしは驚いて思わず飛び上がってしまった。

「えええ、千花ちよっと、それはひどいよ」

元々は千花がわたしを喚びだしたからこうなったんじゃない。

わたしは千花に縋りついて抗議する。

「うん、本当にごめんね。でも、カレヴィ王に酷いことはさせないって約束する」

それって、結婚しても手は出させないってことだよな？

「いや、それより家に帰れないことの方が問題なんだけど。趣味だけど、サイトもやってるし」

「それは異世界召喚でどうにかなるけど。問題は会社だよな。それは残念ながらやめることになるそうだけど……」

それを聞いて、わたしは少なからずショックを受ける。

あああ、わたしの楽しい貯蓄生活が遠くなっていく……。

「そんなあ……。わたし、せっせと貯めた預金を確認するのが楽しみなのに」

わたしがしょんぼりしていると、千花が慰めるようにわたしの肩に手を置いた。

「それなら、わたし向こうに架空の会社作るけど。はるかはその事務員ってことにするよ。給料も今よりはるむし」

「ええっ、本当！？」

思ってもいない千花の言葉に、わたしは色めきたってしまった。なんだ、そんなんだったら大歓迎だ。

それにしても、魔術師ってそんなことまで出来ちゃうの？

っていうか、会社設立って、千花いくら稼いでるんだ。

「カレヴィ王と結婚すれば、多少王妃の仕事はあるけど、それ以外は趣味に没頭できるよ。……はるか、どうする？」

千花にそう言われて、わたしは躊躇することもなく笑顔で頷いた。
「ええー、それなら結婚するー！」

こんな素晴らしい機会を見逃すなんてこと、わたしには出来ない。
……。ああ、この先には充実した生活が待っているんだね。

訪れるだろう近い未来を予想して、うっとりするわたしをカレヴ
イ王とおじさんが呆れた顔で見えていたけど、わたしはそんなことに
構ってなかった。

……。多少問題ありだけど、趣味に浸れるってすごく素敵じゃない？

005 子を成す覚悟

「ちょっと待て。王妃になるなら子を成してもらわなければ困る」
しばらくわたしを呆れて見ていた王様が、はっと我に返ったように言った。

「けれど、はるかに無理強いはしたくないですし……。その件については、わたしがどうかしますから、カレヴィ王はもう少しお待ちいただけますか？」

千花がわたしの顔を見てから、少し困ったような様子で言った。
うん、でもまあ、カレヴィ王が言ったことはごく当たり前のことなんだよね。

形だけの王妃なんて、もらっても困るだけだろう。
そしたら、わたしはおいしただけの話に食らいついてちゃ駄目だよね。

「千花、わたしなら別にいいよ。王様の子供産んでも」

わたしが決意表明すると、千花は驚いたように瞳を見開いた。

「え……。はるか、本当にいいの？　もしかしたら、この先好きな人が出来るかもしれないのに」

千花がうるたえたようにわたしの顔を見た。それにわたしは強く頷く。

「うん、いいよ。……ていうか、わたし自身、自分に好きな人が出来る甲斐性があるとは思えないんだよね」

それに加えて、今も彼氏いない歴更新中なんだから、この先もそんな可能性が高い。

……だったら、別にカレヴィ王とそうなっちゃってもいいんじゃないかなって思うんだ。

わたしのその言葉に、千花は微妙そうな顔をした。

……まあ、もてる千花には分からない感覚だろうなあ。たぶん、千花はわたしが投げやりになつてると思ってるかもしれない。

まあ、成り行きつちや成り行きだけど、結婚するんだったら、こっちもそれ相応の義務を果たさなければ駄目だよな。

「はるかがOKなら、わたしが口を挟むことじゃないよね。……でも、なにか困ったことがあったらすぐに言ってよ？ 出来るだけ協力するから」

千花がわたしの手を取って、それでも心配そうに言ってくる。

うん、持つべきものはやっぱり友達だなあ。

こういう友達がいるなら、別に彼氏とかいなくてもいいや。……

今度王妃になるけど。

「うん、ありがと。その時はよろしくね、千花」

「うん」

わたしと千花が和やかに話していると、カレヴィ王がそこに割り込んできた。

「……話は済んだか？ ハルカが子を成す覚悟をしてくれて助かったぞ。……ところでハルカの歳はいくつだ」

「え、二十七歳」

わたしがそう言うと、カレヴィ王とおじさんが絶句した。

「俺より三つも上なのか？ てっきり二十歳そこそこかと……」

っていうことは、カレヴィ王は今二十四なのか。

それじゃ、地味な上にこんな年上の女じゃ嫌かなあ。

「その歳では、既に男を知っているんじゃないのか？ 王妃になるなら、清らかでなければならぬぞ」

うんまあ、そう思うのが普通だよな。

「ああ、それはないですから。わたしはとっても清らかですよ。なんといっても、わたしはもてない女ですから」

だから、その点だけは胸を張って言える。

そしたら、わたしは事実を述べただけなのに、三人にものすごく微妙な顔をされた。なぜだ。

「……そ、そうか、ならばいい。だが、おまえの年齢は二十歳ということにさせてもらおう。二十七ではなにかと都合が悪い」

「……まあいいですけど……」

個人的には鯖をよむのはどうかと思うけど、王妃にするにはこの歳ではいろいろと不都合な点があるんだろう。

……さつきカレヴィ王が言ってた男を知っている云々と言ってくる輩も今後出てこないとも限らないしね。

「それじゃあ、今後よろしくお願いします、カレヴィ王」

わたしが王様に深々とお辞儀をすると、彼は笑顔で頷いた。

「ああ、よろしくな。俺のことはカレヴィでいいぞ。俺に対して敬語もいらない」

今まで気が付かなかったけど、この王様はかなり気さくらしい。

この先の人生、ずっと付き合っていけなくちゃならない相手なんだから、変に気を遣うような人でなくてよかった。

わたしはほっとしながら笑顔で頷いた。

「うん、分かった。カレヴィ」

「……ただし、公式な場ではそれなりの言葉遣いにしてもらうがな」
う、やっぱりそういうオチがつくよね。まあ、これは仕方ないか。

「とりあえず、おまえには趣味に没頭する前に礼儀作法をみっちり学んでもらう。覚悟しておけ」

「ええ〜っ」

わたしはカレヴィの言葉に抗議の声を上げたが、彼はどこ吹く風だ。

「千花、助けてっ」

「ごめん、こればかりは我慢して」

頼みの千花にもそう返されて、わたしは撃沈した。うう、やっぱり駄目か。

王妃になるなら、それなりの気品を要求されることになるだろうから、たぶんその礼儀作法の授業は厳しいんだろうなあ。

……やっぱり、そうそうつまい話は転がってないよね……。

そう考えながら深く溜息をついているわたしにカレヴィが言ってきた。

「取り急ぎおまえとの婚約の書類を作成するから、ハルカはそれに署名しろ」

「うん」

カレヴィからしたら、善は急げってことなんだろうなあ。

カレヴィがさらさらと書いた『両名は婚約の契約をする事に合意した』という文面に、わたしは彼のサインのあとに名前を書いた。

「——これで契約成立だな。ハルカ、おまえも慣れない環境で大変だとは思うが頑張れ」

「うん」

いきあたりばったりの政略結婚だというのに、わたしの心配までしてくれて、カレヴィなんだかかんだってもいい人だなあ。

……うん、この人とならうまくやっていけるかもしれないかと、わたしは少しだけ安心した。

006 王弟殿下

婚約も決まったことだし、わたしは婚礼までに王妃らしく見える礼儀作法やこの国の歴史なんかを勉強しなきゃないから、これから大忙しだ。

……漫画描いてる暇あるかなあ。あるといいけど。

「話がまとまったのなら、ハルカに俺の血縁の者を紹介したいが、あいにく父母は諸国を旅している。連絡は入れておくから、まあその内帰ってはくるだろう。後で弟を紹介する」

とりあえず今すぐ先王陛下や王太后陛下にお会いする訳ではないらしいと分かって、心の準備がまだできていなかったわたしはちょっとほっとした。

「ハルカが心配することはなにもないよ。お二人とも気さくな方だし」

千花がわたしの心配を察したかのように、フォローしてきた。

そうか、それならちよっと安心した。

でも一人、会わなきゃいけない方が残ってるんだよね。

「……王弟殿下はどういう方なの？」

「シルヴィは今年十六になった。少し気難しいところもあるが、まあハルカが心配することはない」

……でも、一応近い血縁なら、わたしの歳のこととか言わなきゃいけないんだろうなあ。

それを若い殿下がなんと受け取るか、ちよっと心配だ。なんでも気難しいって言うし。

「ゼシリア、シルヴィを呼んでこい。こっぴどいのは早い方がいいかな」

「かしこまりました」

いつのまにか控えていた地位のありそうな年かさの侍女がスカートを摘んでお辞儀をする。そして、王弟殿下を呼びに出ていったし

まった。

うわあああ、こ、心の準備が！

なんだか急に心臓がバクバクしてきたよ。

わたしが胸を押さえて深呼吸していると、それがおかしかったのか、カレヴィが笑った。

「そんなに堅くなるな。ティカ殿も言ったが、おまえはなに心配することはない。未来の王妃として堂々としていればいいんだからな」

堂々って……、ついさっき決まったことなのに、そんな無茶な。わたしが不安な面もちでカレヴィを見てみると、彼はわたしの頭を撫でてきた。

……一応、わたしはカレヴィよりも年上なんだけど……。

そんなことを思っているうちに、ゼシリアと呼ばれた侍女が戻ってきて、程なくシルヴィ殿下がお越しになられます、と伝えてきた。このゼシリアという人、結構地位がありそうだと思ったら、侍女長なんだって。

なるほど、どうりで妙な威厳があると思った。

それからすぐに、シルヴィ王弟殿下が来られたということで、わたしは一気に緊張してしまった。

執務室に入ってきた人は、カレヴィと同じ銀髪と彼よりもやや薄い青い瞳の持ち主の少年というか、青年だった。

褐色の肌のカレヴィと比べて、色素は薄いらしく色白だ。

「お呼びですか、兄王」

十六という年齢にそぐわず、シルヴィ殿下はなんだかしつかりした印象を受ける。

後で知ったことなんだけど、この大陸では十五で成人と見なされるらしい。

「ああ。この度、俺の婚約者となった娘をおまえに紹介したいと思っ
つてな」

カレヴィの言葉に、シルヴィ殿下は瞳を見開いた。

それに構わず、カレヴィは続けた。

「名はハルカ・タダノ。歳は二十歳ということにしてあるが、実は二十七だ」

わたしの実際の歳を聞いて、殿下は黙っていられなかったらしく、少々怒りを含んだ口調で言ってきた。

「兄王、婚礼を挙げる予定だったのは、ディアルスタンの王女では？ この方は他の大陸の方に見受けられますが。それに王の花嫁が二十七とはどういうことです」

確かに、彼の憤りは分かる。

それも兄の相手がこんな冴えない女なんだから。

「ディアルスタンとの縁談は残念ながら破談となった。……だが、このハルカはティカ殿の友人だぞ。王妃とするのに不足はあるまい」
「ティカ殿の……」

そこでシルヴィ殿下が千花の顔をまじまじと見つめた。

それに対して、千花はなんだか気乗りしなさそうに頷いている。

……ああ、そうか。

それでわたしは気がついてしまった。

わたしを王妃にとカレヴィが言ったのは、最初は腹立ち紛れからだっただけかもしれない。けれど、途中でわたしとの結婚に乗り気になったみたいなのは、わたしが千花と友達だったからなんだ。

たぶん、わたしがカレヴィと婚礼を挙げれば、千花はわたしのために最強の女魔術師としてこの国に協力することになるのだろう。

……そっか。

別にわたし自身が必要とされてる訳じゃないと分かってしまってたしはなんだかがっかりしてしまった。

そりゃそうだよね。

わたしには王妃にふさわしい美貌も気品も教養もないもの。

でも、元々が喪女だったわたしだ。

わたし自身に期待されないことは慣れきっている。

それでなんとかわたしは気力を持ち直すと、笑顔でシルヴィ殿下に手を差し出した。

「はるかです。よろしくお願いします、殿下」

こっちの礼儀作法はよく知らないのに、彼に笑顔で握手を求める、困惑しながらも殿下は素直にわたしの手を握り返してきた。

「それとわたしはとうが立ってますが、一応清らかなので王妃となるのは大丈夫ですよ。わたしはこれまで男性にもてなくて恋人もいませんでしたから」

それを聞いて、シルヴィ殿下がなんとも言えない顔をした。

あれ、わたしまた変なこと言っただけかなあ。

そしたら、カレヴィが渋い顔をしてわたしに言ってきた。

「ハルカ、そんな余計なことと言わなくていい」

「え、そう？ 結構重要な事実だと思うんだけど」

わたしがカレヴィにそう言っていると、シルヴィ殿下は困惑したように言った。

「そ、そうですか。それでは俺のことはシルヴィと呼んでください。それから、あなたの義弟になるわけですから、兄王より丁寧な言葉遣いでは困ります」

「あ、そうだね」

彼の言うことももっともなので、わたしはあっさりいつもの言葉遣いになる。

……じゃあ、お言葉に甘えて、彼のことはシルヴィと呼ばせてもらおう。

「それじゃ、よろしくねシルヴィ」

わたしがにつこり笑うと、それまでいくらかうろたえていた彼がほっとしたように笑った。

……うーん、可愛いな。

実はわたし弟が欲しかったんだ。

彼とは仲良くなれるように、暇を見て時々会いに行こう。

そんなことを考えて、にこにこしているわたしに、カレヴィがい

かなりの爆弾発言を発してきた。

「それでだな。挙式の予定だが、一ヶ月後とすることにした」

ええっ、それっていくらなんでも早すぎない？

礼儀作法のこともあることだし、せめて三ヶ月は余裕を見てほしいんだけど。

でも、国民に近々挙式するってことを知らせてあるんじゃないやっぱ
り駄目なのかなあ。

……やっぱり、わたしうまい話に食いつきすぎたかもしれない。

などと思っても、後悔先に立たず。

ちよっと心配そうな千花の視線を受けながら、わたしはひきつり
笑いをしていた。

007 カレヴィ突撃？

「そんなに早く？　ちよつと早すぎない？」

この奇妙な状況を両親に説明して、会社も辞めなきゃならないわたしはカレヴィに食い下がった。

「……なにか困ることでもあるのか？」

カレヴィが眉を上げて見てきたので、わたしは素直に伝えた。

「会社をすぐに辞められるか分からないし、そんなに急に王妃になるのも、わたし自信ない」

できれば円満退社にしたいし、一ヶ月やそこらで礼儀作法が身に付くとは到底思えない。

「はるか不安は分かるよ。準備するにもちよつと期間が短すぎるものね。……カレヴィ王、その辺りはどうにかならないのですか？」

わたしのこぼした不安に千花は頷いた後、カレヴィに交渉してくれる。

「期間が短いことは分かっている。だが、国民に婚礼が間近にあることを知らせてしまっている以上、なるべくなら日程は変更したくない」

「……そっか、そうだね」

カレヴィにはつきりと断られてしまつて、わたしはちよつとがつくり。やっぱり駄目かあ。

「悪いが、式は予定通り行つう。なんならおまえの勤め先には俺から説明するが」

「え……」

カレヴィの思つてもみなかつた申し出にわたしは目を見開いた。いやでも、みんなにカレヴィなんて言つて説明するの？　真実を正直に話したら正気を疑われかねないし。

「でも本当のことを話すわけにはいかないでしょ？　そこはうまく脚色しとかないと。それにカレヴィ、向こうのこと全然知らないで

しょ？ そんなんでうちの上司説得するとか無理があるんじゃないかな」

わたしがそう言うと、ちょっとカレヴィはむっとした。

ありや、機嫌をそこねちゃったかな。

カレヴィが好意で言ってくれてるのはよく分かるし、それはすぐありがたいよ。

せっかくこう言ってくれてるのに悪いけど、でもカレヴィを職場に連れていくのはやっぱりやめた方がいいかもしれないと思うんだ。千花はそんなわたし達の様子を窺いながら顎に指を当ててなにかを考えているようだった。そして、おもむろに口を開いた。

「それなら、わたしも付いていってその都度カレヴィ王に遠くから指示することにすればいいんじゃないかな？」

おお、それはいいアイデアだ。千花、ナイス。

カレヴィもそれはわたしと同じだったみたいで、納得したように頷いた。

「それはいい考えだな。ティカ殿、ぜひ頼む」

……となると、カレヴィを職場に連れて行かなきゃいけないんだよね。

うーん、でもそれって、わたしこんなイケメンと結婚するんです！ ってみんなに見せることになるんだよね。

今までもてなかつたわたしが突然イケメンを連れていったらどうなるか、想像しただけでも恐ろしい。

できればカレヴィが出てこない方向で、上司にわたしの退職を納得させたいけど、たぶん無理だろうなあ……。

そう考えてわたしがちょっと息をついていると、カレヴィがわたしの肩を励ますように軽く叩いた。

「そういうことだから、ハルカは安心している。ティカ殿の協力もあることだしな」

わたしの溜息を不安感からのものと勘違いしたらしいカレヴィは笑顔で言ってくる。

「う、うん」

仕方なくわたしが頷くと、それまで黙っていたシルヴィも後押しするように言った。

「兄王がこう言っているのです。ハルカはもう少し気持ちをゆったりと持って兄王に任せておけばいいんですよ」

「う、うん……」

未来の義弟にまでこう言われちゃもう反論の余地もない。わたしはまた頷いた。

ああ、できれば穏便にことが済めばいいなあ、とか思ってたけど、これはちよつと無理っぽい。

けど、自分で決めたことだから仕方ない。

千花もわたしのために動いてくれることだし、ここは頑張ろう。

とりあえず、その前に両親にカレヴィとの結婚を知らせる難題が待ち受けているけどね。

そして、カレヴィの王妃になることが決まったわたしには、彼の部屋の隣の王妃の間が与えられることになった。

まあ、隣と言っても間に共同スペースみたいなものがあって、王と妃が一緒に過ごすときはそこを使うらしい。

この大陸ではどの国の王宮もこの作りだと千花に教わった。

千花はその能力でいろんな国に行っているらしく、この世界のことを知るに当たって、すごくいい先生だ。

「はるか、今日は積もる話があるから泊まっていきたいんだけどいい？」

千花がそう言ってきたのをわたしは喜んで受け入れた。

ああ、ひさしぶりに千花とお泊まりかあ。千花のこれまでの生活のことも聞きたいし、すごくわくわくする。

すると、なぜかカレヴィが渋ってきた。

「なにも俺の婚約者になった今日でなくともいいだろう。ティカ殿

とは別の機会に……」

「カレヴィとはまだ結婚してるわけじゃないんだからそのくらいいいじゃない。本当に千花とは久しぶりに会ったんだから、たくさん話したいことあるし」

「しかし、今夜は……」

そう口を挟んできたシルヴィをカレヴィが片手で押しとどめると、仕方なさそうに溜息をついた。

「仕方ない、今夜だけだぞ」

「あ、ありがと。それで、明日は次の日に会社に行くから家に泊まるね」

そう言ったら、なぜかカレヴィがひきつったような顔をした。そして、それをシルヴィが気遣うように見ている。

あれ、なんかまずいこともあるのかな？

「……どうかした？」

千花もそんな二人の様子を不思議そうに見ている。

「いや、なんでもない。明後日にはハル力はこちらに住むということとで間違いないんだな？」

「うん」

……まあ、会社の上司の説得がうまく行けばの話だけど。

とは、思ってもわたしは口に出さなかった。

それを言ったら、千花のお泊まりがなくなりそうな予感がしたからだ。

カレヴィ達の様子はちょっと気にはなっただけど、わたしは目の前の千花とおしゃべりのことで頭がいっぱいで、すぐにそれを忘れた。

……ああ、本当に楽しみだなあ。

これから気の重い両親と職場の説得が待ち受けているんだし、とりあえず楽しいことで気を紛らわそう、うん。

008 召喚の真相

それでわたしは今、わたしにあてがわれた寝室に千花といた。
で、二人とも寝間着に着替えて、一緒に天蓋付きのベッドの上に
座り込んでいる。

絹の寝間着は千花の綺麗な体の線を露わにしている、友達のわたしでも惚れ惚れする。

出るところは出て、手足は細くて長いっていいなあ。格好いい。

「……まず、はるかに謝らなきゃいけないことがあるんだ」

千花が改まってわたしに向き合ってきたので、わたしはちょっと
うろたえる。

「な、なに？」

「召喚の座標指定を失敗したっていうのは実は嘘なの。わたしは、
わざとあそこにはるかが現れるようにし向けたの」

「え……」

にわかには信じがたい話に、わたしの頭が理解を拒否する。

「うそ……」

じゃあ、千花がわざとわたしとカレヴィが結婚するようにし向けた
たってこと？

「本当にごめんなさい！」

千花はベッドの上で土下座する。対するわたしは信じられない事
実に呆然としているだけだった。

「な、なんで……？」

とりあえずそれだけ絞り出すと、千花は顔を上げた。

「今回カレヴィ王と結婚する予定だったディアルスタンのリリーマ
リー王女は既に想い人がいたの。それは王女の守護騎士なんだけど」

——なになに、王女と騎士の恋！？

それに対するわたしの反応は素早かった。なにを隠そう、今わたしが描いている漫画は騎士と姫君の恋物語だ。なので、わたしはその話にもものすごく興味を引かれてしまった。

「——詳しく聞かせて」

わたしは千花に詰め寄って肩をがしつと掴むと、目を輝かせて彼女を覗きこんだ。

千花はそれに若干引き気味になりながらもちゃんと説明してくれた。

「王女の守護騎士の方も、彼女を憎からず想っていてね。そのうちディアルスタン国王に思い切って結婚したいと申し出るつもりだったらしいの」

「あらー……」

わたしは思わず気の抜けた声を出してしまった。

だって、それじゃカレヴィ、思い切り邪魔者じゃない。

物語的にはおいしいけど、ディアルスタンの王女と騎士はさぞ焦っただろう。

下手したらそれって、二人の愛の逃避行フラグだよ。

「でも、王の方はそんなことは全く気づいてなかったから、王女とカレヴィ王との婚約話を進めちゃったのよね。カレヴィ王も今まで執務に明け暮れてたけど、重臣達にせっつかれて、そろそろ結婚しないともまずいと思ったらしくて、その政略結婚を決めたらしいのね」「政略結婚かあ。よく知らないわたしに結婚しろって言うてくるくらいだもんね。それくらい平気ですよね」

まあ、あの時のカレヴィは、ほとんど決まりかけていた婚礼を目の前で駄目にされて頭にきてたんだろうけど。

それにしても、カレヴィは王女がどんな人物でも一向に構わなかったってことか。わたしはその王女じゃないけど、なんか失礼だな。わたしも人のことは言えないけど、本当に恋とか愛は必要ないんだな。結婚するはずだった王女が可哀想だ。

……けど、王なんだから、結婚するに当たって相手のこと少しく

らい調べない？

そうすれば、王女とその騎士が恋仲なくらい分かりそうなものだけだ。

そしたら、さすがにカレヴィもリリーマリー王女と婚約しようとはしないはずだ。

「それで今回、リリーマリー王女からわたしにどうにかしてほしいって依頼があつて。けど、あまり時間がなくてどうしようかと思つてただけど、婚礼契約書にカレヴィ王がサインしなければこの結婚は成立しないことになるのよね。それで、そこに目を付けたの」

「……それはわかつたけど、なんでそこにわたしが召喚されるの？」
「突然召喚されてきたことにすれば、契約書が滅茶苦茶になつても不自然じゃないかなと思つて。それにはるかなら、カレヴィ王とうまくいくかもしれないなつて思つたし」

「ええっ？ 千花、なに言つてるの？」

いきなり千花が妙なことを言い出したので、私はびっくりする。

わたしとカレヴィならうまくいくかもつてなんだ。仮にもカレヴィは王様で、わたしはただの一般庶民（それも喪女）だぞ。

悪いけど、それは千花の思い違いじゃない？

「二人とも自分の恋愛には頓着しないタイプじゃない。愛のない結婚が耐えられない人もいるけど、その点、はるかなら大丈夫だと思つたし。だから、わたしはその可能性にかけたの」

まあ、確かに結婚に夢も希望も持つてないけどね。千花、鋭すぎる。

「でも、本当にカレヴィ王に手を出させるつもりはなかったんだよ？ それだけは信じて」

まあ、それだとカレヴィが可哀想すぎる氣もしたけど、最強である千花なら可能なんだろうな。

「うん、分かつてる。……千花、もしかしてわたしの行く末も心配してくれてた？」

わたしがそう言つと、千花はちよつとうるたえた。……凶星かあ。

確かにわたしも一生一人でも別にいいと思っではいたけどね。

そうか、我が道を行くわたしは、そんなに千花に心配をかけてたのか。ちょっと反省。

「……恋愛面はともかく、カレヴィ王は悪い人じゃないから。はるかが不幸になることはないと思っただ。本当にごめんね、はるか」
そう言つと、もう一度千花は深々と頭を下げた。

「別にいいよ、千花がわたしのこと心配してくれてるの分かったし。千花はこのこともう気にしないで。……それに生活面もものすごく保証されてるしね」

いたずらっぽくわたしが笑つて言つと、千花は安心したように息をついて、「うん」と頷いた。

千花によると、わたしとカレヴィがある程度打ち解け、お互いに信頼関係が築けたところで本当の意味での結婚生活を送ってもらう計画だったそうだ。

でも、どうしても反りが合わなそうだったら、婚約話を白紙に戻すつもりだったとも言っていた。

……でもそれだと、わたしに話が有利すぎない？　なんだかカレヴィがいいように利用されてるみたいでちょっと可哀想な気がする。
カレヴィも、わたしを娶ることで千花の力を借りようっていうんだからお互い様かもしれないけどさ。

でも千花のわたしに対する気遣いは、わたしの「子供産んでもいいよ」発言で無になつてしまったわけだけど。

千花の気持ちは嬉しいけれど、やっぱりこういうのはフェアに行かないとね。

翌朝。千花とわたしとカレヴィは一緒に朝食をとりながら、これからのことを話していた。

「とりあえず、一回家に帰って事情を話しておきたいんだけど。会社にも辞めるって言わなきゃいけないし」

「あ、そうだね。それがいいよ。わたしもはるかの家にお邪魔するから」

千花がわたしの言葉に同調してくれたことで、わたしはちよつと癖のある両親の説得に千花という味方を得られて、かなり心強かった。

うちの両親は千花の言うことならたぶん信用するだろうし、それにいざというときには千花に魔法を披露してもらえばいいだろう。

「うん、そうしてくれると助かる」

いきなり異世界の王様のところに嫁にいくって言ったら正気を疑われかねないから、千花が同行してくれるのは本当に助かった。

「……俺も行かなくていいのか？」

カレヴィは執務とかでいろいろ忙しいんだけど、でもわざわざそう言うてるのは、かなり気を遣ってくれてるんだろうな。

「どうしても必要だったら出てきてもらうかもしれないけど、今のところ大丈夫だよ。うちの両親はここに直接来てもらって理解させるつもりでいるし」

彼氏もいなかった娘が異世界の王様と結婚するなんて、普通だったら到底信じてはもらえないだろうけど、そこは千花がいるし、大丈夫だよな。

「……問題は会社かなあ」

わたしは焼きたてのパンにバターを塗りながら溜息をつく。

「そうだね。いきなりやめます、はい分かりましたって訳にはいかないものね」

千花もスクランブルエッグをフォークですくいながら同意した。

「うーん、急ですけど外国に嫁ぐことになりましたって言ったら、認めてくれるかなあ。一応他の子になにかあった時のために仕事内容は教えてはあるんだけど」

ていうか、結婚すること自体信じてもらえなさそうな気がするの

は、わたしの気のせいだろうか。

なにしろ、わたしがもてなくて彼氏もいなかったことは職場に浸透しているしさ。

「ではそこで俺を呼べ。必ず認めさせてやるから」

おお、力強いお言葉。カレヴィがそう言つと、なんとなく可能な気がしてくるから不思議だ。

「そう？　じゃあ、そうしようかな。カレヴィ、その時はお願いね」

「ああ、まかせておけ」

そう言つて爽やかに笑う顔はマジでイケメンで、なんで結婚相手が喪女のわたしなんだと思わざるを得ない。……まあ、手近にいたのがわたしで、たまたま最強の魔術師の千花の友人だったからというのは理解はしているけど。

でも感情面ではいかんともしがたく、なんとなくもやもやしつつも、わたしはとりあえず帰宅することにした。

009 おとんとおかん

千花の異世界移動魔法でこちらの世界の自分の部屋に移動してきたわたしは、まず適当な服を選んで着替えた。

昨日いなくなっていた間、千花の家に泊まっていたことにするためだ。

言い訳するのに、いくら外見に頓着しないわたしでも、さすがにあのよれよれのジャージで外出はしないからそうしたんだけど、着替えてる間、千花はわたしの汚部屋を整理整頓してくれた。……う、ありがたい。

それで改めて着替え終えたわたしは、家の鍵とバックを持って家の外に千花の魔法で移動した。

……家にいるのに、また外から入るってのも、なんかすごく間抜けな感じがしないでもないけど仕方ない。

おとんとおかんにはわたしが昨日いなくなってたのは分かっているだろうし、ちょっと情けないけどこれは苦肉の策だ。

「……ただいま」

家の鍵を開けて中に入ると、リビングからおかんが飛び出てきた。

「……はるか？」

おお、素早いな。……一応わたしのこと心配してくれてたんだらうか。

「連絡もしないで、今までどこ行ってたの。携帯は通じないし、まったくあんたって子は。頼みたい用事があったのに」

……なんだ、結局わたしよりもその用事の方が大事なのか。

おかんからのこういう仕打ちは幼少から受けているけど、やっぱりちよつと落ち込む。

……まあ、いい加減、わたしもこういう人なんだと理解して受け流せばいいんだけどね。

でも、理性では分かっているけど感情が付いていかないことであるでしょ？

それがまさにこの時プチ爆発して、わたしはむっとしてしまった。

おかんの上からの物言いにわたしが黙り込んでいると、そこで千花がフォローを入れてくれた。

「おばさん、お久しぶりです。すみません、はるかとはわたしの家に泊まってたんです。心配をおかけしてすみませんでした」

申し訳なさそうに頭を下げて謝る千花を見て、おかんは驚いたようだ。まあ、千花は結婚して外国に行っていることになってるからね。「まあ、千花ちゃん、また綺麗になって。いつ帰ってきたの？」

近所でも美人で出来がいいと評判の千花に久しぶりに会って、おかんはころりと機嫌がよくなった。

……ちよつと、ぐれてもいい？ それには十年ぐらい遅すぎる気もするけど。

「つい、夕べです。それで、はるかに会いたくていきなり呼び出しちゃったんですけど、本当にすみませんでした。だから、はるかは全然悪くないです」

「まあ、それじゃしょうがないわね。でも、はるかは今度からそういうときは連絡入れときなさいよ」

「……分かった」

おかんの小言に内心うんざりしつつも、ここで逆らうとまたうるさいので、とりあえず頷いておく。

「さ、千花ちゃん上がって、上がって。すぐにお茶出すから」

おかんは上機嫌で千花を促すと、「お父さん、千花ちゃんが帰ってきたわよ！」とリビングに戻っていった。

……なんていうか、娘のわたしと千花との扱いの差が激しすぎる。確かにわたしは出来の悪い娘だけださ。

「……おばさん、なんというか相変わらずだねー……」

千花が同情するように言ってきたのをわたしはただ苦笑いして受

け止めた。

改めて自分の評価を親に突きつけられた気がして、非常に情けなかった。

「……それにしても、ごめんね。わたしが召喚したせいで、いろいろ迷惑かけて。おばさん達にも心配かけちゃったし、すぐに帰せばよかったね」

千花が眉を下げて申し訳なさそうにわたしに謝ってきた。

美人の千花にそんな顔をされると、こっちが悪いことをしたように思えてくるから不思議だ。

「別にいいよ。うちの親がいい歳した娘を干渉すぎるんだよ」

……とはいえ、連絡の一つもすればよかったな。

携帯の電波くらい千花ならどうにかできただろうし、それは失敗だったなと思う。

まあ、過ぎてしまったことは仕方ない。次は気をつけよう。

「それより、千花上がったよ。千花には説明頑張ってもらわないといけないし」

——そうなのだ。

情けないことに、わたしでは通常の結婚話すら信じてもらえない可能性が高いので、千花の存在は不可欠なのだ。

「うん、お邪魔します」

千花は頷いて玄関を上がると、わたしの後に付いてリビングに入った。

「おじさん、お久しぶりです」

千花はおかんに比べるとちょっと影の薄いおとんに笑顔で挨拶した。

千花のその様子はとても爽やかで感じがいい。

「千花ちゃん、久しぶりだね。元気だったかい？」

「はい、おかげさまで。夕べははるかをお借りしちゃってすみませ

「んでした」

「うん、いいんだよ。こういうことがないとはるかは家にひきこもってるんだから」

「……おとももなにげに毒舌だね。それにしても、どれだけ親の評価低いんだ、わたし。」

わたし達はとりあえず、リビングのすぐ傍のダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいた。

千花はおとおかんに外国での生活についていろいろ聞かれていたけれど、そのうちにわたしは業を煮やして無理矢理話を遮った。

「あ、あのさ、実は大事な話があるんだ」

「なに、まさか会社辞めたいとかじゃないでしょうね。この不景気に冗談じゃないわよ」

う、いや、それも含まれてはいるんだけどね。

わたしが口ごもると、おかんの目がつり上がる。

おかんがなにか言おうとする前にわたしは慌てて言った。

「じ、実は今度、わたし結婚することになったんだ」

すると、おとおかんがうるんな目でわたしを見た。

「……まあ、今まで男の影がなかったわたしの言うことを二人が信じられなくても仕方ない。」

「本当です。あの変なことを言うと思われるでしょうけど、聞いてください。はるかには異世界の王様の花嫁になることになりました」

この近所の人の評価が抜群に高い千花のその言葉に、おとおかんの目が点になった。

「あの……、千花ちゃん？ どうしちゃったの？ はるかならともかく、千花ちゃんがそんなこと言うなんて……」

わたしならともかくって、どういう意味だ、おかん。

いくらファンタジー漫画を描いているわたしでも、現実と空想の区別くらいはついてるぞ。

「信じられないのも当然ですね。……実はわたし、その異世界で魔

術師をしています」

見てください、と千花は言う、その手から明るい球体を出した。……もしかして、これが昨日千花が言ってたあかりを灯す魔法なのかな？

千花はふわふわ浮かぶその球体をいくつもその手から出した。それをおとんとおかんが釘付けになって見ている。

「……千花ちゃんの手品師なのかな？」

おとんが間の抜けた顔で聞いてくる。まあ、魔術師＝手品師と受け取っても不思議じゃない。

「違います。言うなれば、魔法使いですね。……よく見てください」

千花はあかりの魔法を消してから椅子から立ち上がると、瞬間的にリビングにあるテレビの傍に移動した。

それをぽかんとして見る、おとんとおかん。

……まあ、信じられなくても無理はない。わたしもこんな事態にならなければ、到底信じられなかった。

千花はまた瞬間的にテレビの傍からもう一度元の場所に戻ってくる。

それをおとんとおかんは少し恐怖の入り交じった目で見ていた。

「……信じていただけましたか？」

その視線に少し寂しそうな笑顔で千花は尋ねる。

「そ、そんな馬鹿なことが……」

おとんが千花に事実を突きつけられても、まだ信じたくないというように呟いたけど、千花がそれに対して強く頷いて言った。

「あるんです。これからその王様のところに移動してもらいますが、玄関で靴を履いてもらっていいでしょうか？ できれば出かける支度をしていただけるといいんですけど。あと戸締まりもしてください」

「あ、そうだね。ガスの元栓も閉めとかなきゃ」

呆然としているおとんとおかんを後目に、わたしは家の戸締まり

を開始した。

二人は呆然として今は使いものにならないし、わたしが率先してやるしかない。

「おじさん、おばさん、信じられないかもしれませんが、これは本当のことです。すみませんが、準備してください」

千花がおとんとおかんに向かつて右手を広げると、二人はふらふらと自分達の部屋に行き、よそ行きの服に着替え始めた。

……もしかして千花がなにかしたのかもしれない。

おとんとおかんは玄関で靴を履いたところで我に返ったようだった。

すっかりよそ行きの格好になっている自分達におとんとおかんはうろたえた。

「こ、これはいつたい……」

「千花ちゃん、どうなってるの、これ」

「すみません、説明は後で。……はるか、行くよ」

「うん」

千花に促されて、わたしも慌てて靴を履いた。

……しかし、さすがに四人も玄関にいと狭い。

けれど、それを気にする様子もなく、千花は短く何事かを唱える。すると、その次の瞬間にはわたし達は豪華絢爛な広間に移動していた。

ザクトアリアなのは分かるけど、えーと、ここはどこだろう……？

010 カレヴィとの両親の謁見

千花に連れられて来たところは、今まで一度も見たことのない場所だった。

……まあ、もっともカレヴィの執務室と居室、その間の共同空間と王妃の部屋くらいしかまだ行ったことないんだけどね。

もう少しわたしもこの王宮の間取りを覚えた方がいいかもしれない。

とは言っても、この中はとんでもない部屋数らしいんだけどね。でも、所要な施設の場所くらいは覚えた方がいいだろう。

「来たな、ハルカ」

その声のした方を見ると、一段高くなったところにある豪華な椅子にカレヴィが悠々と腰掛けていた。ひょっとしてあれは玉座だろうか？

「ここは……？」

わたしが疑問を口にするのと、おじさん改め、宰相のマウリスがそれに答えてくれた。

「ここは謁見の間ですよ、ハルカ様」

言われてみれば、確かにそれっぽい。わたしはなるほど納得した。

この謁見の間は絢爛豪華ではあるんだけど、不思議と下品な感じはしない。それは所々置いてある品のある調度品のおかげかもしれない。

「ハルカ、そちらにいるのがおまえの父母か？」

玉座の上からカレヴィが声をかけてくる。それにわたしは頷いた。

「うん、そう」

うん。こうしていると、カレヴィ、確かに王様らしく見えるね。

なんというか、王様！ というオーラみたいなものがある。そこで初めておとんとおかんは我に返ったらしくて、見慣れない

豪華絢爛な謁見の間と、若いけれど威厳のある人物を目の当たりにして、落ち着かなさげに視線をさまよわせていた。

「そうか。……俺はザクトアリア王国の国王カレヴィだ。この度はるかを花嫁に迎えることになった。今後、よろしく頼む」

「は、はあ……」

威風堂々としたカレヴィに対し、おとんは気の抜けた返事をした。

……まあ、今まで一緒に暮らしていた娘が、突然異世界の王様の花嫁になるなんて訳の分からない状況になったわけだし、この反応は無理もないだろう。

一応反応したおとんはまだいい方で、おかんにいたっては呆然とカレヴィの端正な顔を見つめているだけだった。

「ハルカ、隣に座れ」

おとん達と一緒にいたわたしは、カレヴィに隣の席を示されてちよつと驚いてしまった。

だって、あれって王妃の席じゃない？ わたしはまだ王妃になってないぞ。

「え、いいの？」

「構わない。おまえは一月後には俺の妃になる。遠慮するな」

そう、それじゃ遠慮なく。

わたしはカレヴィの言葉に従って、一段高くなったところに上がり、カレヴィの横の豪華な椅子に座った。

そしておとんとおかんの方に向くと、二人は信じられないものを目にするかのように、並んで座っているわたしとカレヴィを呆けて見ていた。

それを千花がちょっと離れたところで様子を窺っている。

異世界に来てしまえばもうこっちのものだし、大体おとん達を説得できたも同じだから、千花には感謝だね。

「今言った通り、一月後にはハルカは俺の花嫁になる。そなたらもそのつもりでいてくれ」

「……はあ」

おとんとおかんは未だに信じられない様子で、間の抜けた返事をする。

「……そういうことですから、今現在はあるかが勤めている会社は辞めてもらうことになります。その代わりと言ってはなんですが、わたしが新たに会社を設立して、はるかをその事務員とすることになりましたから、経済的な心配はいらないと思います」

「千花ちゃんが会社を……」

千花の説明にぼかんとするおとんとおかん。結婚しているといつても、まだ二十代の千花が会社設立っていうのは驚愕に値するのだろう。

でもこれは、わたしが異世界で王妃になるよりも現実的だと思うぞ。

「ティカ殿。そのことなんだが、ハルカにかかる費用はザクトアリアから出すことにしたいのだが」

「そうですね。はるかには王妃になるのですし、その方がいいかもしれませんね」

カレヴィの提案に千花は頷いて了承した。

そうか、わたしの給料はこの国から出るのか。まあ、それが一番妥当だろうな。

千花にも変な負担はかけたくないし。

でもそうになると、わたしも趣味だけにかまけてられないな。王妃の仕事も頑張らないと。……今のところ、どんなことをやらなければいけないのか全然分かってないけれど。

まあ、それは後でカレヴィとか侍女長のゼシリアに聞けばいいか。「……ハルカの父母はなにか言いたいことはないか？ あれば答えるが」

カレヴィのその言葉に、おとんははつとして言った。

「お、恐れながら、どうしてもはるかが王妃に選ばれたのでしょうか？ この娘は容姿は普通ですし、性格も決して気の回る方ではない。友人には恵まれています、そう社交的でもない。それなのに、な

「ぜですか」

すると、今まで呆然としていたおかんもそれに便乗するように言った。

「そ、そうです。王様ならもつと若くて綺麗な方を選び放題でしょう。それなのに、なぜよりによってこんな娘なんですか？ わたし共にはとても理解できません」

……二人とも、ここぞとばかりに言いたい放題だな。二人が普段わたしのことをどう思ってるかよく分かったよ。

わたしが思わずむっとしてると、カレヴィが椅子の肘掛けに置いてあったわたしの手にその手を重ねてきた。

「王である俺が、ハル力を選んだのだ。それに文句があるのか」

カレヴィが威圧的にそう言つと、おとんとおかんはかなりびびつたようだった。そして、それ以上言う気もなくなつたようで、口を噤んでしまった。

「……もうこのことに対する意見はないな。それでは、これで謁見は終了とする。ハル力の父母は別の間で休むように。……ハル力、来い」

わたしは席を立つたカレヴィに手を取られて立ち上がると、彼にぐいぐいと引っ張られた。

彼の表情をそつと窺つと、顔が険しい。

……なんか、カレヴィ結構怒ってるみたいなんだけど。

ひょっとして、おとんとおかんの話を聞いて、変な女を掴まされたとでも思っているのかなあ……？

それだと、王妃業の傍らに趣味三昧の生活が泡になって消えそうな気もしたけど、でもわたしが千花とザクトリアの繋ぎということがあるから、カレヴィも王の立場からしたら簡単には婚約は取り消せないはずだ、……けど。

……うーん、困つたなあ。

一ヶ月後の婚礼については早すぎると思つてたけど、でもここでカレヴィにやっぱりが変わったとか言われたら、それはそれで困

る。

ね。それこそ、おとんとおかんに後でなんとと言われるか分からないし

わたしは困惑しながらも、市場に売られていく子牛のごとく、複雑な気分でカレヴィに手を引かれて行った。

011 憤るカレヴィ、舞い上がる両親

わたしは機嫌の悪そうなカレヴィに、そのまま謁見の間の控え室みたいなところまで強引に連れていかれた。

そしてカレヴィはわたしと向き合う。

「こんなことは言いたくはないが、なんだ、あの両親は」

……あれ、別にわたしに怒っているわけではないんだ。

わたしは思わず気が抜けて、カレヴィの端正な顔を見返した。

「……俺は、このことに対しておまえの父母からの怒りを受ける覚悟もしていたんだぞ」

「え……、なんでおとん、じゃなかった、父と母が怒るの？」

カレヴィの思ってもいなかった言葉に、わたしは思わずぽかんとしてしまった。

「普通は、異世界などという訳の分からないところに大事な娘をやりたくはないだろうが」

あー、普通はそうなのか。

まあ千花が言うには、うちの両親はちょっと特殊らしいし。

「……でもたぶん、二人ともまだ状況がはつきり把握できていないだけなんじゃないかな。だから失言みたいなことしちゃったんだと思っし」

おとんとおかん、謁見の間中呆然としてることがほとんどだったものね。

それがいきなり威厳のあるカレヴィに意見を求められたら、それはうるたえるだろう。

でもまあ、あれは娘の結婚相手に対しては失言だろうけど、まごうことなきあの二人のわたしに対する本音なんだろうな。

……そう考えると、なんだかちよつと落ち込んできた。

おとんとおかんがああ調子なのはいつものことなんだから、いい加減わたしも慣れというか、諦めればいいのに。

でもそれでもやつぱり、この歳になっても親には認められたいんだろうか。

「それがなんだ。娘のことをあげつらうような真似をして。親なら娘の長所くらい分かっていそうなものだろう」

「あー、カレヴィわたしのために憤ってくれてるんだね？」

彼に惚れるまではいかないけど、これにはちよつと感動した。

カレヴィ、なんだかんだ言っているいい人だなあ。

千花しかり、親よりも血の繋がりのない人の方が信頼できるってなんだかちよつと淋しくもあるけれど。

「……未来の王妃をあそこまで言われて黙っているほど、俺は薄情ではないつもりだぞ」

「うん、ありがと。……でもわたしの長所って自分でも思いつかないなあ。だからうちの両親がそういう物言いになったのも仕方ないと思うよ」

わたしがそう言っていると、カレヴィは顎に手を当てて少し考え込んだ。「ハルカの長所は、おおらかなところじゃないか？ たまに卑屈な発言も混じるが」

「……卑屈？」

カレヴィの言っていることがよく分からなくて、わたしは首を傾げた。

「自分はもてない女だと豪語していたじゃないか」

ああ、あれね。

「いや、実際もてなかったし。だから、そう言っただけなんだけど」胸が大きいせいで変なセクハラはされるけど、もてた覚えは全然ない。

「それはやめろ。おまえの容姿はおまえが言うほど酷くない。それに、おまえは俺の妃になるのだから、そんなことはもう関係ないだろう」

「うん、まあ。そうだね」

わたしはカレヴィのその言葉にこくりと頷いた。

王様でイケメンなのに、気さくでこういう気遣いができる彼は、結婚相手としては、これ以上は望むべくもないのだろう。

……ただし、突然現れたわたしをほとんどやけくそで王妃に据えようとしたことから、結婚に対するやる気がほとんど皆無だということが分かる。

後でわたしが千花と友達だつて知つて、この結婚が国益になるつて理解した途端、やたら乗り気になったけどさ。

たぶん、カレヴィはわたしと同じく愛や恋というものをあまり重要視していないのかもしれない。

そんなことを漠然と考えていたら、カレヴィはわたしが頷いたことで、ほつとしたようだった。

「……それでは、ハル力の両親と合流するか。ハル力はまた着替えでこい」

「え、このままでいいよ」

いちいち着替えるの、めんどくさいし。

この世界の格好じゃないけど、一応それなりの服装をしているんだからこれでいいじゃない。

わたしは断ったけれど、カレヴィがそれを許さなかった。そして、有無を言わさない口調で言った。

「ハル力、着替える」

カレヴィの命令で大急ぎで自分に与えられた王妃の間に戻ったわたしは、侍女達に例のキラキラした衣装に着替えさせられた。

あ、そうだ。

そういえば、明日会社辞めるつて言うに当たつて、用意するものがあるんだつた。

わたしがそれまでうつかり忘れていたのは、会社の人に配るお菓

子。

急だったから無理かなあと思ったけれど、ゼシリアに一応言ってみたら、ご自宅に帰宅される前にはご用意致しますと言ってくれた。わあ、ゼシリア、有能すぎる。

「ありがとう。助かる」

わたしが感謝の言葉を彼女に伝えると少し困惑したようにゼシリアは言った。

「わたくしは当然のことをしたまでですから、そんなもったいないお言葉など、わたくしごときにおかけにならないください」

「いや、でも嬉しかったし。本当に助かったし、ゼシリアありがとうね」

わたしがにつこり笑って言うと、「ありがたいお言葉、ありがとうございます」と少し困ったようにゼシリアが微笑んだ。

……うーん、王妃となる身分の者はやたら侍女に礼を言うものじゃないのかな？

でも、こういうのは身分どうこうに関わらずいくら言ってもいいんじゃないかとわたしは思うんだ。

それで、支度を終えたわたしは、ゼシリアに案内されておとおかんのいる部屋に通された。すると既にそこには千花の他にカレヴィも来ていた。

中央の大きなテーブルには、おいしそうな料理と中身はお酒と思われるデカンターなんか置いてあって、それを目にしたらなんだかお腹がすいてきた。

わたしの姿を認めたおとおかんなは真っ赤な顔でふらふらとわたしに近寄ってきた。

「おおっ！ はるか、そういう格好をするとまるで別人だぞ！ さすが未来の王妃だ！」

なにがさすがなんだかよく分からないけど、おとおかんなは既に出て上がっていた。

……なんで、よりによってこんな場所でこんなに飲んだんだ。立派なよっぱらいじゃないか！

「はるか、よくやったわ！　まさかあんたがこんな玉の輿に乗るなんて、まるで夢みたいだわ！」

そう言いながら、おかんは酒と思われるグラスをあおる。

その様子をカレヴィは呆れたように見ていた。

まあ、彼の気持ちは分かる。

さっきまで、おとんとおかん、カレヴィに渴を入れられてたのに、それが一転してこの有様なんだもん。

「はるか、ごめん。ちよつとお酒でも入れて、気分をほぐしてもらってから説明しようとしたら、おじさんとおばさん、飲み過ぎちゃって、こんなことに」

千花が申し訳なさそうに謝ってくるけど、どう考えてもこんなに正体を失うほど飲んだ本人達に問題があるだろ。ちよつとは自制しろ。

「侍女になにを用意したのか聞いたら、ルルア酒だったそうだ。これは飲みやすいが、かなり強い酒だ」

カレヴィは、強いと言うわりにはそのルルア酒なるものをくいく飲んでいいる。カレヴィはお酒には相当強いみたいだ。

わたしはカレヴィに促されて、彼の隣に座った。

カレヴィにルルア酒を注いでもらうと、一口それを含んだ。……なるほど、フルーティで確かに飲みやすい。

そんなに強いお酒なら、ちよつと油断するとすぐに酔っぱらいそうだ。

そう思いながら、わたしはおいしい料理を肴にルルア酒をちびちびやっていたら、またしてもおとんとおかんが寄ってきた。

「正直、おまえにはまったく期待していなかったがぁー、世の中には不思議なこともあるもんだなあ」

……うっさい、おとん。

さりげなく傷を抉るようなこと言うな。

「それもこーんなハンサムな王様とお。わたしがもうちょっと若かったら代わりたかったわ」

……もうちょっとって、それでも歳取りすぎだろう、おかん。

「……しかし、ハルカの両親は変わっているな」

カレヴィは溜息をついてしみじみと言う。

……わたしがここに来るまでにおとんとおかん、いったいなにをやったんだ。

千花に聞くと、二人は狂喜乱舞の踊りを今まで披露していたらしい。

うわあ、変な酔っぱらいだ……。傍目にはさぞ奇妙な光景に映っただろう。

しかし、おとんとおかに踊り癖があるなんて初めて知ったよ。

なんだかさつき二人にムカついていたのが馬鹿馬鹿しくなり、わたしは手元のルルア酒のグラスをうつかりあおってしまった。

——そしてその後。

見事に出来上がってしまったわたしは、カレヴィを床に正座させて「政略結婚も結構だけど、そればかりっていうのはどうなの？それに、もしわたしがとんでもない不細工だったらどうしてたの？」と懇々と説教していたとか。

それを後で千花から聞かされたけど、わたしはまったく覚えていなかった。

012 突然ですが結婚します

とりあえず、おとんとおかんにはわたしがカレヴィの妃になることは理解してもらった。

ただ問題はまだ残っている。というか、これが最大の難関だ。ザクトアリア王妃になるには、その準備期間もあるから、わたしはすぐに会社を辞めなければならない。

ただ、これが社会人として周りに非常に迷惑をかける行為なのは分かっている。それは本当に申し訳ないと思う。

わたしの直属の上司である主任も今すぐ辞めることに渋るのは容易に想像できる。

この世界に来たのが金曜日の夕方、そして今日は土曜日。明日は会社の出勤日だ。

上司の反応やら、突然仕事を放り出すことになったことについて考えるととても気が重かったが、とにかくわたしは休み明け早々主任に話をする事とした。

そして、月曜日の朝。

わたしはいつも通り車で出勤した。

ゼシリアには昨晚のうちにみんなに配るお菓子を丁寧かつ上品なラッピングで個別包装してもらってある。

これなら、みんなに配るのに申し分ない。

ゼシリアと、たぶん厨房の人達いい仕事するなあ。

ちなみにカレヴィと千花はもう少ししたらわたしの魔力をたどって、会社に移動してくる手筈になっている。

わたしはいつもより早めに会社に出勤して、主任に話を切り出すための準備をしていた。

今日のわたしは、あか抜けない水色の事務服と白いスカートというこの会社ではまあ標準の格好だ。

「悪いけど、しばらくここで待機しててね」

こちらの世界に移動してきたカレヴィや千花という備品倉庫は滅多に人が来ない穴場だ。

もし万が一人が来ても、千花がいるから隠れることはできるし、まあ大丈夫だろう。

「……俺も一緒に行かなくていいのか？」

千花に異世界移動されてきて、この世界の服装をしているカレヴィが少々心配そうに言ってきた。

うん、イケメンはなにを着ても似合うなとこんな時だけわたしは妙に感心してしまった。

カレヴィは初めてきた世界だというのに、そのことに動揺する気配もない。うむ、肝の据わったやつだ。さすが王様。

……とは言っても、まだ車とか電車とか、立ち並ぶビルとか見た訳じゃないから、その辺りはまだピンときいていないだけかも知れないけど。

「うん、まだ大丈夫。必要になったら呼びにくるから。……ちょっと殺風景なところだけど、我慢してね」

わたしは力強く頷くと、カレヴィと千花も「分かった」と言っ
て頷いた。

「はるか、頑張つて。駄目そうならすぐそっちに向かうから」

わたしは千花の応援を受けて、心強く思った。千花がいるなら百人力だ。

「うん、じゃあ後でね」

わたしは二人の存在をありがたく思いながらも、千花とカレヴィに手を振り、職場の事務所に向かった。

始業四十分前の事務所にはまだ誰も来ていなかった。

この会社はみんなぎりぎりにしか来ないらしく出勤が遅い。他の会社に勤めている友達に聞いてみたら、驚かれたけれど。

わたしは謝罪と今までの感謝の意味も込めて、みんなの机の上をいつもより綺麗に水拭きしてから、床を箒で掃いた。

ちりとりでゴミを集めていたところで、ようやく主任がやってきた。

「おはよう。なんだ、只野ちゃん、今日はやけに早いな」

まあ、いつもは二十分前とかだもんね。主任がそう言うのも当たり前だ。

「ええ、まあ。主任、おはようございます」

わたしは適当にはぐらかしつつ彼に挨拶すると、とりあえずちりとのゴミを捨てに行った。

それから給湯室で手を洗って、お茶の準備をする。

お湯で急須と主任の湯呑みを暖めてからそのお湯を捨て、お茶を淹れる。

わたしは主任の湯呑みをお盆に乗せて運びながら、結婚話をなんと言って切り出そうかと考える。……あ、もう着いちゃった。

「どうぞ」

「ありがとう」

わたしが机にお茶を置くと、主任はまず一口啜ってから唸った。

「うーん、やっぱり只野ちゃんのお淹れたお茶が一番旨いなー。なんというか、春山ちゃんは淹れ方が適当だからなー」

ちなみに、主任が言った春山ちゃんというのはわたしの後輩に当たる事務の女の子だ。

まあ、わたしの淹れ方もごく普通なので、そんなに褒められるようなものではない。

わたしはお盆を胸の前で抱え込むと、カレヴィとの結婚話を思い切って言うてみることにした。

「ところで、主任。お話があるんですが」

「ん？　なんだ、困ったことでもあったの？」

「いえ、そういうことではないんですが……」

むしろ困るのは、わたしじゃなくて会社の方なんだけれどね。

突然わたしが抜けたとしたら、会社としても仕事のやりくりに頭を悩ませるだろう。

「……実はわたし、今度結婚することになったんです」

そう言った瞬間、お茶を飲んでいた主任が思いきり吹き出した。

ちよつとその反応はベタすぎるだろ、と漫画描きの視点から、つい心の中でつつこんでしまう。

とりあえず、わたしは急いで給湯室から布巾を取ってきて、惨憺たる状況の主任の机を拭いた。

「あ、ああ、ありがとう。……けど、只野ちゃん結婚するって本当なのか？」

「本当です。あと急で申し訳ないのですが、すぐに辞めさせてもらいたいんですけど」

わたしがそう言うと、案の定主任は渋い顔になった。う、やっぱり、こういう反応になるよね。

「すぐって一ヶ月後くらい？」

「いえ、できれば今日にでも」

かなりの無茶を言ってるのは自分でも分かっている。主任も渋りきった顔になった。

「それは困るよ、引継もあるし」

そりゃ、そうだろうな。

わたしでもこんな状況にいきなりなったら困るだろうし。

「……一応、春山さんにはわたしの仕事を教えてはありますが」

「でも、いきなり仕事量二倍じゃ、とても春山ちゃん一人じゃさばききれない。次の子を入れるにしても、只野ちゃんにはしばらくいてもらわないと」

「すみません。でも、外国の人に嫁ぐことになったので、それは無理なんです。本当にすみません」

わたしはここぞばかりに主任に誠心誠意頭を下げて謝った。……こんなことしても会社に迷惑をかけるのは変わりないんだけど、やっぱり気持ち的にすごく申し訳なかったし。

「只野ちゃんが外国人と……」

主任はモテない女のわたしが急に結婚すると言ってきた、そしてその相手が外国人だということにショックを受けたようだった。

——その時だった。

「おい、ハルカ。まだ説得できていないのか」

呼んでもいないのに、なぜかカレヴィがそこに現れてわたしは驚いた。

さらに間の悪いことに事務所の他の人達や作業員のおばちゃん達が出勤してきて、どう見ても外国人で、飛び抜けた美形のカレヴィを目にして大騒ぎになった。

彼がわたしの関係者だと知られて、わたしはもみくちやにされながら、噂好きのおばちゃん達に質問責めにあう。

「……え、えーと、彼がわたしの結婚相手です」

仕方なくわたしは、カレヴィを手で示しながら紹介する。

——その後の騒ぎは、もちろん先程の比ではなかった。

ちよつとした大混乱の後、わたしとカレヴィは主任から報告を受けた係長、課長と一緒に応接室にいた。

「ほう、それではカレヴィさんはフランスの方なんですね」

どうやっているのかは分からないけれど、わたしとカレヴィの耳元には千花の指示が随時届いている。

わたし達はそれに従って、目の前の課長と係長に結婚に至る嘘の説明をしていた。

彼らを騙していることは心が痛むけど、本当のことを言うわけにはいかなないので仕方がない。ここは割り切って話を進めなきゃ。

最初にカレヴィをフランス人という設定にすると聞いた千花に、浅黒い肌のカレヴィははたしてそう見えるのか不安を覚えたわたしだったけれど、まったく問題なかったようだ。

フランス人といったら今まで白人のイメージしかなかったけれど、実際は色々な人種の混血が進んでいて、見た目も様々なんだそう。課長と係長もそれは初耳だったようで、カレヴィのどこの国とも知れない容貌を興味深げに見ていた。

「俺の家はそこそこの格式のある旧家だ。そこで、ハルカには花嫁修業がてら、言葉を習得してもらう。その為には今すぐ日本を発たなければならぬ」

課長と係長相手にどこまでも偉そうにカレヴィは言う。

まあ、一国の王様だから仕方ないのかもしれないけれど、もうちょつとなんとかならないものか。

カレヴィの第一声を聞いた時から、わたしは思わず頭を抱えたくなってしまったけど、生まれながらにして王になることが決まっていた彼には臨機応変という文字はないらしい。

ちなみに、課長と係長には最初にカレヴィは教わった日本語が偏っているの、偉そうに聞こえるのは勘弁してくださいと断ってあ

る。

でも、課長と係長もカレヴィの威風堂々とした態から、その口調もあまり気になっていないようで、むしろとても偉い人を迎えているような態度になっている。

「そうですか。只野さんは仕事もできるし、本当は抜けられると困りますが、そういう事情ならいたしかたありませんね」

おお。課長、今のはお世辞でも嬉しいよ。

カレヴィの言葉に頷きながら言った課長の言葉にわたしはちよつと感動する。

「確かに、今度から只野さんに急ぎの文書を上げてもらうことができなくなるのはちよつと厳しいな。只野さんのタイピングのスピードは貴重だったからね」

確かにキーボードと電卓の打ち込み速度だけはこの会社の誰にも負けない自信はある。

でも、こうやって認められてると思うと嬉しいな。

「すみません」

自分では駄目駄目な人間だと思ってたけど、会社の人達はこんなわたしを評価してくれてたんだ。

そう思うと本当に申し訳なくて、わたしは二人に深々と頭を下げた。

「まあ、こんな事情ならしょうがないから、只野さんは自分の幸せを優先して。慣れない海外生活、体に気をつけて頑張ってね」

「あ、ありがとうございます」

課長がわたしに激励の言葉をかけると、係長も続けて言った。

「溜まっている有給休暇はちゃんと消化するからね。仕事のことから、みんなで分担してなんとかするから、後のことは気にせず、自分の幸せのことを考えてね」

「本当にすみません。ありがとうございます」

課長と係長、本当にいい人過ぎ。

暖かい二人の言葉にわたしはつい涙腺が緩んで、ちよつとだけ泣

いてしまった。

「ハルカ」

カレヴィがわたしの肩に手を置いて、心配そうに覗きこむ。

課長と係長はそんなわたし達を微笑ましそうに見ながら、心から祝福してくれた。

そしてめでたく寿退社することになったわたしは、自分のロッカの整理をしてから、机にある私物をまとめると、事務所の人達にゼシリアに用意してもらったお菓子を配って回った。

ザクトアリアの王族用に出されるお菓子だから、その美味しさは保証済みだ。

「おめでとう、只野さん」

「まさか只野ちゃんが嫁に行くとはなあ。向こうでも頑張ってるね」

「只野さん、こんな素敵な彼氏がいるなら早く言つてよ。……前に嫌なこと言っちゃってごめんね」

先週、取引先の接待にわたしをかりだそうとしていた相田さんがばつが悪そうに謝ってきた。

「本当にすみません。あの時のことは気にしてないですから、相田さんも気にしないでください」

相田さんもこうやって自分の非を認めてきちんと謝ってくるんだから、別に嫌な人ではないんだよね。ただ、物言いがちょっときついでだけ。

「只野さん、いなくなっちゃうなんて寂しいですうっ」

そう言つて抱きついてきたのは、後輩の奈緒ちゃん。さつき主任に春山ちゃんと呼ばれていた子だ。

ちよつと頼りないところもあるけれど、きっと彼女ならわたしの代わりにバリバリ働いてくれるだろうと信じている。

「急なことで本当にごめんね。迷惑かけるけど、後のことは頼むね」

わたしがそう言うと、奈緒ちゃんは真っ赤な目をして、はい、と頷いた。

「せっかくのおめでたいことなのに、只野ちゃんにお祝いをあげられなくてごめんね」

主任が申し訳なさそうに言ってきたけれど、いきなりこんな無茶を聞いてくれただけでも充分ありがたい。

「いえ、そんなこと気にしないでください。急に無理を言つてすみませんでした。それから……、今まで本当にお世話になりました」

わたしは事務所の人達に深々と頭を下げてから、失礼しますと言つて、後ろ髪を引かれつつも踵をかえず。

わたしはカレヴィに肩を抱かれて、その背に「只野さん、お疲れさま」「体に気をつけてね」「お幸せに」等々、ありがたい言葉を受けながらその場を去った。

わたしが備品倉庫まで戻ってくると、その場に待機していた千花は笑顔で迎えてくれた。

「あつ、はるか！　よかったね、うまく説得できて」

「うん」

千花のその笑顔を見たら、なんだか急に泣きたくなくて、わたしは彼女に抱きついてしまった。

やつぱり、みんなとそれなりに仲良くやつて、一生懸命働いてた会社を辞めるのはすごく淋しいよ。

ぼろぼろ涙をこぼすと、千花は慰めるようにわたしの背を優しく撫でてくれた。

「……こういう場合は、普通、夫になる俺に抱きつくものじゃないか？」

とかなんとか、カレヴィがばやいたらしいけれど、その時のわたしはもちろん聞いている余裕なんてなかった。

たとえあっても、たぶんカレヴィに抱きつくことはないと思うけどね。

014 花嫁修業……なのかな？

めでたく寿退社したわたしは、またザクトアリアに戻ってきていた。

その前に家に戻って、サイトには私事が忙しいので更新が滞ると告知してあるので、これでしばらくは安心だろう。

これからわたしには、怒濤の花嫁修業が待っているんだよね。…

…それを考えると、ちよつと気が重い。

千花もいろいろ忙しいらしくて帰っちゃったし、これからのことを考えるとかなり不安だ。

わたしは王と王妃の共同の間でカレヴィと晚餐をとった後、香り高いコーヒーを飲みつつ、少し溜息をつく。

それを耳聴く聞きつけたカレヴィが言ってきた。

「なんだ、ハルカ。不安なのか？」

「……まあ、不安といえば不安だけど。わたしは庶民だし、ちよつと気が重いよ」

はたして一ヶ月の間に王妃らしい気品を身につけることができるのか、それさえ不安だ。

「そうか、それもそうだな。だが、おまえは無理をせず、徐々に慣れていけばいい。……そういえばおまえには決まった侍女を付けていなかったな。代々王妃には三名付くことになっているが」

「え、そんなにいららないよ」

わたしに三人も付くとかそんな大げさな。

一人でも大抵のことはできるのに。

「そうはいかない。王妃となればそれなりに体裁を整えなければならぬ」

「そうなの？」

王妃の体裁とか、なんか面倒だなあ。

侍女も交代要員を含めて二名もいれば充分だと思うんだけど。

「侍女長と相談して、若くともしつかりした者を選ぶようにしよう。そうすればハルカのいい相談相手になるだろう」

「う、ん。ありがとう」

ちよつと重いけど、カレヴィはわたしのためを思ってたってくれてるんだから、そこは感謝しなきゃいけないよね。

カレヴィが侍女長のゼシリアを呼ぶと、彼女は既にわたし付きの侍女を決めてあつたらしく、すぐに紹介されることになった。

新しくわたしに付く侍女は、赤毛で水色の瞳、褐色の肌のイヴェンヌ、日本人のそれよりもずっと濃い黒髪黒目、象牙の肌のモニカ、白っぽい金髪、緑青色の瞳、白い肌のソフィアと見た目も様々だった。

この国は他の国よりもいろいろな見た目の人が多いらしいから侍女もそんな感じな人達になつたらしいけれど、これだったら名前も間違ふこともなさそうなのでよかったのかもしれない。

それに、この国の人は陽気な人が多いから三人とのおしゃべりが楽しそうだ。

侍女達を紹介された後、わたしは自分の居室に戻って、下描きまですていた漫画のペン入れでもしようかと思っていたけれど、なぜかそれをゼシリア達に止められて、湯殿まで連れていかれた。

まだ寝るまでに時間はあるし、今はいいよと断ったんだけど、「だからこそです」という謎の言葉を受けて、わたしは首を捻る。

そんなこんなでわたしはゼシリア達に気持ちいつもよりも丁寧に洗い上げられ、香油を使ったマッサージも丹念にされて絹の寝間着を着せられた。

「それではおやすみなさいませ」

「ハルカ様、頑張ってくださいませ」

……頑張るってなにを？

年若い侍女達から赤い顔で言われた言葉に対して、わたしは天蓋付きのベッドに腰掛けながら首を傾げる。

そうしているうちに、侍女達は明朝伺いますと言って寝室を出ていってしまった。

なんだかよく分からないながらも、寝るにはまだ早いし、家から持ってきた漫画でも寝ころんで読むかと、居室に置いてあるそれを取りに行こうとして立ち上がった。

その時、いきなり寝室のドアを開けてカレヴィが現れたのでわたしはびっくりしてしまった。

「ハルカ」

いるはずのないカレヴィの出現に、わたしはすっかりうろたえてしまった。

「カ、カレヴィ？ どうしてここに」

まさかとは思うけど、アレをしにきたんじゃないよね？

カレヴィとはまだ結婚している訳ではないし、ただ婚約中というだけなんだから、ぜひそうであってほしい。

「おまえを抱きにきた」

はい——っ！？

嫌な予感的中してしまったわたしは思わず飛び上がってしまった。

「な、なに言ってる……、だってまだカレヴィとは婚約期間中でしょう！？」

カレヴィからなるたけ離れようと後ずさったわたしは、自分からベッドにダイブしてしまった。

思わず悲鳴を上げたわたしをカレヴィは呆気にとられたように見ていたけれど、わたしが体を起こす前に手首を押さえつけられてそれを阻まれた。

「だ、駄目だって！ だって、花嫁は清らかじゃないといけないって言ってたじゃない！」

必死に足をじたばたさせながら訴えたが、カレヴィはまったく気にしたふうでもなかった。

「夫になる俺なら別だ。……それにこれは夜の習いという花嫁修業の一環でもある」

——そんなの、聞いてないよ!!

そう叫ぼうとした途端、カレヴィの唇に口を塞がれた。

「ちょ……、カレ、……ヴィ……ッ」

文句の一つも言ってやろうと口を開くも、その度にカレヴィの深い口づけを受けてわたしは息も絶え絶えになる。

こんなことがあるんだったら、なぜ事前に言ってくれなかったの？
それだつたら、心の準備もできたのに。

「こんな、急に……、酷いよ……っ」

なんとかそれだけ言っただけで、彼から返ってきたのは容赦のない言葉だった。

「おまえは俺の妃になると決めたのだろう。だつたら我慢しろ」

……そう言われると、わたしはなんにも言えなくなってしまう。

最終的にザクトアリア王妃になることを決めたのは他でもないわたし自身なんだし。

「……分かったよ」

わたしが諦めて体の力を抜くと、カレヴィは無駄に色気を振りまいてふっと笑った。

けれど、その笑みは経験ゼロのわたしには恐怖でさえあった。

思わず息を飲んでしまったわたしをカレヴィは見下ろすと、いらん宣言をしてくれた。

「いろいろと仕込んでやるから覚悟しておけ、ハルカ」

お願いだから、程々をお願いします。

なんと言つてもわたしは初めてだし、その点はさすがにカレヴィも考慮はしてくれるだろう。

……などと思ったのは実はとんでもなかったと、後にわたしは身を持って知ることになってしまった。

015 不機嫌な朝

「……そう怒るな、ハルカ」

少しばかり遅い朝食の席で、カレヴィはわたしにちよつと後ろめたそうに言ってきた。

昨夜は結局合意の上でそういう行為に至ったわけだけど、なぜか起き抜けにまでアレを無理矢理されて、わたしは機嫌が悪かった。

……まあ、それ以外にも理由はあるけど。

「おまえが思いの外よかったので、つい我を忘れた。すまない」

うるさい、このエロ王。……いや、野獣。

わたしを結婚相手に選ぶくらいだから、アレの方も淡泊なのかと思つたら、実はとんでもなかった。

カレヴィは、恥ずかしがるわたしにさんざんエロいことや言葉責めをし、そしてあるうことが、わたしにまでそのエロいことをするように強要してきたのだ。

「……言っておくけど、わたしは初めてだったんだからね？」

初めてでさすがにあれはないだろう。

恥ずかしいから詳細は言わないけど、そういうのを商売にしているような人がするようなことをわたしはカレヴィにされたのだ。

カレヴィはさすがに最初はなるべく痛くしないように配慮してくれてたみたいだけど、でもやっぱり初めてだから痛かったし。……

まあ、でもそれは仕方ない。けど問題はそれからだ。

カレヴィは途中でたがを外してしまったようで、わたしは何回もやられてしまった。そしてわたしは、今腰が痛くてたまらない。

今朝も侍女二人に両脇を抱えられてやつとこの席に着いたぐらいだ。

……これが初めての人間にやることか？ やりすぎにも程がある。「それは悪かったと思っている。しばらくはあの手の無理強いはいし

ない」

わたしの怒りの言葉に、カレヴィはばつが悪そうな顔で謝ってきた。

「……なら、いいけど。それにしてもいやに手慣れてたけど、過去にそういう人でもいたの？」

わたしがそう聞くと、カレヴィはちよつとろたえてた。

……カレヴィは美形だし、王様だし、そういう人がいてもわたしは一向に気にしないけど。むしろいい方が不自然だろう。

「いや、王宮付きの高級娼館からの娼婦としかそういうことはしてない」

「……へー……」

意外と言えば意外。

まあ、その方があとくされもないのかもしれないけど。

そうか、だからわたしに対しても高級娼婦相手にするような行動に走ったんだ。

「あれ、普通の姫だったら、びつくりしすぎて泣いてたんじゃない？　いくらなんでも初めてであんなこと強要するとかないでしょ」

わたしの代わりに別の姫がカレヴィの結婚相手となった場合を想定して言ってみる。

うん、結婚に夢を持ってる姫ならあまりの扱いにショックを受けるかもね。

わたしは、夢も希望も持っていない歳だった女だからまだましだけど、それでも初めてであれば酷いと思う。

「……だから、すまないと……、そうだ、ハル力なにか欲しいものはないか」

それまで居心地悪そうな顔をしていたカレヴィが突然思いついたように言ってきた。

どうやら物で釣る作戦らしい。

ふーん、カレヴィがせっかくそう言うならねだってみようか。ちようど、欲しかったものがあるんだ。

「それじゃ、腕カバーが欲しい」

わたしがそう言っと、なぜかカレヴィの目が点になった。

「……腕、カバー……？」

「漫画描くのに衣装の袖が汚れそうなんだよね。腕まくりしてもいいけど、腕が汚れるのは変わりないし」

わたしの描いている漫画はカレヴィには既に見せてある。

最初カレヴィは漫画特有のデフォルメした描き方に戸惑っていたけれど、すぐにそれに慣れて漫画の読み方について聞いてきた。

基本的には一頁の右から左に読んでいくんだよと言ったらすぐ理解したらしくて、わたしの描きかけの原稿にすいすい目を通していった。

……こんなことなら今まで描いた原稿も持ってくるんだっただな。

今度向こうに行ったときは全原稿を持ってこよう。

そういう訳でわたしの描いた漫画を読んだカレヴィだったけれど、女らしくないわたしにしては、中身がかなり少女趣味だったので結構驚いていたみたいだ。

人は見かけによらないものだな、とわたしの顔を見て彼はしみじみ呟いてた。……失礼な。

ちなみにわたしの描く漫画は、千花に魔法をかけてもらっているから、こちらの世界の人にも理解できるようになっている。

……本当に千花の魔法は便利だなあ。

わたしがつくづく感心していると、カレヴィがちょっと困った顔をして聞いてきた。

「……そんなものでいいのか？ 首飾りとか腕輪が欲しいとかないのか？」

「うっん、腕カバーがいい。それも木綿で黒くて汚れが目立たないやつ」

わたしがきつぱりはつきりそう言つと、カレヴィはどことなく不満そうな顔で大きく溜息をついていた。

……なんだ、腕力バーじゃいけなかったのかな？ でも当面欲しいものもないし、もしあつても千花が持つてきてくれるし。

わたしが首を傾げながらそう思っていると、カレヴィがちょっと呆れたような顔で言ってきた。

「本当に、おまえの考えることは俺には分からん」

うーん、庶民と王様の考え方の違いは結構大きい、のかな……？
なんだか、それだけじゃないような気もするけど。

それからカレヴィは、イヴェン又達に腕力バーをすぐ持つてくるように言いつけると、ソフィアが代表してそれを持つてきてくれた。

——これだよ、これ。

構造は簡単だから、たぶんあるんじゃないかとは思つてたけど、
やっぱり異世界にもあつたよ、黒い腕力バー！

ちよつと感動しながら装着したら、カレヴィに今着けるのはやめ
ると言われてしまった。

これくらいいいじゃん、けち。

仕方なく腕力バーを外してカレヴィと食後のコーヒを飲んだら、
千花が律儀にわたしの様子を見にやってきた。

「千花っ！」

昨夜のことを報告しようとか千花に駆け寄ろうとしたら、途端に腰
に痛みが走つてわたしはよろけた。

「危な……」

「ハルカツ」

バランスを崩したわたしに、千花とカレヴィが声を上げる。

その途端、見えないなにかがわたしの体を支えて、どうにかわたしは転ばずに済んだ。……もしかして、千花が魔法で受け止めてくれたのかなあ。

「はるか、どうしたの？」

瞬間的に千花がよろよろしてるわたしの傍に移動して尋ねた。
カレヴィも椅子から立ち上がって、わたしの傍に寄ってくる。

「あ……、うん。ちょっと、腰が痛くて」

「……腰？」

千花が首を傾げながらもわたしの肩に触れると、さっきまでわたしを苦しめていた腰の痛みが急になくなった。

「あ、あれ……？」

「治癒魔法を使ったの。それにしてもはるか、腰が痛いってもしかして……」

千花が眉を寄せて言いづらそうにした。

うん、まあこういうことは本人を前にして言いくいよね。

「あ、うん。昨夜カレヴィとそういう事になったんだ」

わたしがそう言った途端、千花がきつとカレヴィを睨んだ。

「……どういことです？ まだはるかとは婚約期間中でしょう」

千花のその厳しい視線にも特に堪えた様子もなく、カレヴィはこともなげに言った。

「我が国では、王及び王太子に輿入れする花嫁は、婚礼一ヶ月前の婚約期間中に伽の習いをするしきたりがある。俺はそれに従ったま
でだ」

「え……」

千花はザクトアリアのその風習を初めて知ったらしくて、愕然とした顔になった。

「は、はるか、ごめん。わたし、この国にそんな風習があるなんて知らなくて。……大変だったでしょう？ ごめんね」

千花がうろたえながらわたしに縋りついて謝ってきたけれど、これは彼女が悪い訳じゃない。まあ、あえて言うとしたら悪いのは――
――

「ううん、千花が謝る事じゃないよ。結局王妃になるって決めたのはわたし自身だし。だから気にしないで」

「でも……」

わたしは笑って言うてみたけど、千花はまだ申し訳なさそうだ。

……仕方ない。千花は最強の魔術師で忙しいのは分かっているけど、その時間を少しもらってしまおう。

「じゃあ、午前中までわたしに付き合つてよ。久しぶりに千花に漫画のアシしてもらうから。それで今回の件は帳消し。ね？」

わたしがにつと笑って千花の肩を叩きながらそう言うつと、彼女はちよつとだけ泣きそうになりながら、うん、と頷いた。

「……まあ、俺も事前に言うておかなくて悪かったが」

それまでわたし達の会話に入りづらそうにしていたカレヴィがわたしに謝ってきた。

そんなこと今更言われても遅いんだよ！

だからわたしは、ここぞとばかりに言うてやった。

「本当だよね！！」

「……おまえ、ティカ殿と夫になる俺との扱いが違いすぎるぞ」

「そりゃ、千花は幼なじみの友達だもん。昨日今日会ったばかりのカレヴィとは歴史が違うよ。……それよか、カレヴィ執務に取りからなくていいの？ わたしもいい加減漫画描きたいし、女同士の話もしたいから、もう自分の部屋に戻るね」

わたしはカレヴィの抗議を軽くあしらうつと、千花を促して、共同の間から自分の居室へとさっさと移動する。

「おい、ハルカ」

カレヴィがなにか言いたそうにしたけど、無視。

腕カバーはもらったけど、やっぱりまだカレヴィにはアレのことでいろいろと怒ってるんだよね。

「……ねえ、はるか。カレヴィ王が呼んでるけど」

千花が気遣わしげに言うてくるけれど、いいのいいの、気にしないで。

「それよか、聞いてよ千花。カレヴィったら酷いんだよー！」
わたしは完全にカレヴィをしかとして千花に話しかける。
わたしのあからさまな無視にちよつと呆然としているカレヴィを
気の毒そうに見ながらも、モニー力達三人もわたし達の後について
きた。

——それから。

カレヴィはすごすごと自分の執務室に戻っていつて、ちよつと拗
ねていたとか。

まあ、これはゼシリアから聞いた情報なんだけどね。

でも彼がわたしにしたことを思えばそれでも生ぬるいと思う。

どっちにしろ拗ねたいのはこっちの方だよ！ とカレヴィに声を
大にして言いたいわたしだった。

016 アシスタント

わたしは昨夜のカレヴィの所業を千花と侍女達三人に話した。

とは言っても、侍女三人は未婚者だし、さすがにありのままのことは話せなかった。

ただ、カレヴィのしたことが初めての夜にしてはやりすぎたことと、そんなわたしの体のことを労ってくれなかったことだけ話した。けどそれでも、わたしが朝まともに起きあがれなくて、モニカとソフィアの介助を受けて朝食の席に着いたこともあり、本当の事情を知らない彼女達の同情を誘ったようだった。

「陛下、あんまりですわ」

「ハルカ様は初めてだというのに、酷すぎますわ」

「陛下は自分本位で物事を進めすぎですわ。こういうことは殿方の思いやりがあつて初めてうまくいくものだと思いますのに」

ふふふ、そうでしょ、そうでしょ。

カレヴィったら酷いよね。

でも、本当はもっと酷かったんだよ。

あんなことやこんなことされたなんて言ったら、免疫のない彼女達のことだからきつと卒倒しちゃうかもね。

まあ、千花には後でこっそり本当のことを伝えるつもりだけど。

そして、昨夜のことをごまかしながらもカレヴィの文句を言いつつ、わたしは居室のテーブルに漫画の原稿を広げていた。

ちなみにわたしは腕力バー装備、アシスタントの千花は魔法で防御するから腕力バーはいらないと言って綺麗なドレスの格好のままでいた。

まあ、千花の美貌に腕力バーはちょっとというか、かなり台無しだからそれは正解だったと思う。

「それにしても……、さっきのはるかのカレヴィ王への態度はまず

かったんじゃないかなあ」

千花がペンで枠線引きをしつつそう言ってきたので、ちょっと納得できなかったわたしは反論する。

「だって、あれくらいじゃないときつと反省しないよ。カレヴィは王だからあまり強く言う人間もないだろうし」

カレヴィが昨夜わたしにやったことを正直に言ったら、みんなドン引きすると思う。

それを怒ってちょっとしかとするくらい可愛いもんじゃない。

「まあ、そうかもしれないけれど……。でも、あまりやりすぎると二人の仲に関わるかなって思っ。できればはるかカレヴィ王は仲良くやって欲しいし」

……うーん、そう言われるとなにも言えなくなっちゃうなあ。

千花はわたしの幸せのためにカレヴィとくつつけようとしているんだし。

……仕方ない、ここは譲歩するか。

「分かった。わたし後でカレヴィに謝るよ」

確かに、結婚生活が始まる前から問題起こしちゃうまずいものね。

カレヴィのしたことには、今回だけは目を瞑ろう。

「うん、そうした方がいいよ」

わたしの言葉にほっとしたように千花が頷く。

……それにしても、千花っていろいろ気遣いの出来るいい友達だなあ。わたしにはもったいないくらい。

「……ハルカ様は見事な技術をお持ちですね。素晴らしいですわ。わたくしもなにかお手伝いすることができればよろしいのですけれど」

イヴエン又がわたしの作業を見ながら溜息をついて言ってきたので、わたしはペン入れをする手を止めてうーん、と考えた。

まったくの初心者でも枠線引きとか消しゴムかけならできるかも。……もしよかったら、やってみる？ それじゃ千花、ベタ塗りに

変わってくれるかな？」

「うん、分かった」

千花は頷くと、すでにペン入れし終わった原稿を魔法で乾かし、×印の付いたところを筆で塗りつぶし始めた。

「え……、でもわたくしに出来るのでしょうか。足手まといにならなければよいのですが」

わたしの提案が彼女にとっては思いもかけないことだったらしくて、イヴェン又がうつたえる。

彼女はちよつと自信がなさそうだけど、枠線引き自体はそう難しい作業じゃない。

そこでわたしは、紙にシャーペンで線を何本か引き、その上をペンでなぞらせて練習させることにした。

「……出来ましたわ！」

千花の隣に座つて、しばらく定規とペンで紙相手に格闘していたイヴェン又は充実感で瞳をきらきらさせて言った。……うお、ちよつと眩しい。若いつていいね。

肝心の枠線の出来は……どれどれ。うん、きちんとシャーペンで描いた線の上を一発でなぞれてるし、これなら合格かな。

それでわたしは原稿を一枚イヴェン又に渡し、枠線引きを開始してもらった。

それに時折、彼女の隣に座っている千花の的確なフォローが入り、イヴェン又は少し緊張しながらも、綺麗に枠線を引いていた。

……ありがと、千花。さすが千花は気が利くなあ。

わたしは千花の存在をありがたく思いながらも、ペンを走らせる。千花は仕事が速いから、おちおちしてられないのだ。

「イヴェン又ばかりずるいですわ。わたくしもお手伝いしたいです」
ソフィアがそう言うと、モニター力も負けじと言う。

「わたくしもハルカ様のお役に立ちたいですわ」

うーん、彼女達の気持ちは嬉しいけど、道具もそんなにないから
枠線引きの練習してもらうわけにもいかないし。後は消しゴムかけ
ぐらいしか残ってないな。

……今度元の世界に帰ったときは、もう少し、ペンとか定規とか
も補充しておこう。

「……じゃあ、ソフィアは消しゴムかけして。モニーカは悪いけど
イヴェンヌとソフィアの分の腕力バー持ってきてくれるかな。あと
みんなのお茶淹れて。あ、モニーカの分もね」

わたしがそう言つと、ソフィアはぱつと顔を輝かせ、モニーカは
がっかりしたような表情になった。

う、あちらを立てればこちらが立たず。

でもモニーカには悪いけど、本当にやってもらうことがないんだ
よ。ごめんね。

「ごめんね。モニーカにも明日手伝ってもらうから。ソフィアは、
わたしの隣に座って。今から消しゴムかけしてもらうけど、紙を破
らないように、文字の書いてあるところだけは残して綺麗に消して
……こんなふうに」

わたしは千花がベタ塗りして乾かしてくれた原稿に慎重に消しゴ
ムをかけて手本を示した。

「分からなかったら、声かけてね」

「はい、かしこまりました」

ソフィアは使命感に燃えた瞳で頷くと、教えた通り綺麗に消しゴ
ムをかけてくれている。さすがに王宮付きの侍女だけあって、仕事
が丁寧だ。

「腕力バー、頂いてまいりましたわ！」

そこで、一時わたしの居室から出ていたモニーカが戻ってきて、
侍女二人に腕力バーを渡した。

すると、二人はわたしが指示するまでもなく、腕力バーを装着し

た。

見ると、モニターも自分の分を確保しているようだ。腕力バーを大事に居室の隅っこに置いていた。

それで、モニターカにお茶を淹れてもらってみんなでほっこりと一休み。

そこで、今描いている話の前の話の原稿はないのかと侍女達に聞かれた。

「うん。あるけど、向こうの世界に置いたままなんだ。できるだけ早く持ってくるね」

三人がわたしの漫画を読みたいって言ってくれてるのはすごく嬉しいけど、次はいつ向こうに帰れるかなあ。

「それなら、今日はるかしの礼儀作法が終わった後に向こうに行こうか。いろいろ入り用のものもあるだろうし」

千花がわたしの意向をくみ取って、そう言ってくれたからすごく助かった。

「あ、うん。ありがと、千花」

「お礼なんていいって。わたしも向こうに用があるしね」

それでわたしは千花のありがたい言葉に乗ることにして、向こうに一時的に帰ることにした。

ああ、ほんとに助かった。嬉しい。

千花がいてくれて本当に良かった。

「じゃあ、家から原稿持ってくるからね」

わたしが侍女達にそう伝えると、「まあ、嬉しいですわ」「楽しみですわー」「ええ、本当に」とうきうきしながらまた作業に入っていた。

それを眺めていて、わたしはあることに気が付いた。

……そうすると、カレヴィにも向こうに一度帰るって言うておかないといけないんだよね。

んー、お昼の時に彼に断っておけばいいかなあ。……わたしが無視したことでカレヴィの機嫌が悪くなければいいけど。

わたしが手を止めてちよつと考え込んでいると、消しゴムかけまで終わった原稿を眺めていたモニーカが聞いてきた。

「ハルカ様、これで完成なのですか？」

「ああ、まだ。トーン貼りとか写植とかが残ってるよ」

わたしが簡単にトーン貼りと写植の説明をすると、侍女三人が感嘆したように溜息をついた。

「ハルカ様は随分と細かい作業がお得意ですね」

「絵もお上手ですし」

「お話も素敵ですわ」

「……ありがとう」

侍女三人が口々に褒めてくれるので、わたしはちよつと照れながらも礼を言った。

いやー、恥ずかしいけど、やっぱり褒められるのは素直に嬉しいね。

それに、三人の新たなアシスタント候補が増えたことも嬉しいし。わたしがそう言ったら、千花にすかさず突っ込まれた。

「……はるか、王の婚約者付きの侍女だよ。そこは間違えちゃ駄目だよ」

う、そうだった。彼女たちは王宮付きの侍女だった。だとしたら、そうそう荒使いはできないよなあ。

わたしがそう思っていたら、ソフィアが言った。

「まあ、ティカ様、わたくしは侍女兼アシスタントがよいですわ」
そうするとイヴェンヌも言う。

「わたくしもそれがよいです。なんだかおもしろそうでわくわくしますわ」

「わたくし、ゼシリア様に正式に許可をいただきますわ。そうすれば、なにも問題ないでしょう」

モニーカもわたしや千花になっこり笑いかけながら言う。

……この三人、マジだよ。

マジでわたしのアシやる気だ。

わたしは感動しながら、千花はちょっと呆れながら三人を見ていた。

でもまあ、これで効率が上がって趣味のサイトの更新頻度も上がってめでたしめでたし、なのかなあ？

けど、その前にカレヴィの花嫁修業という難関が立ちふさがってるけどね。

017 仲直り

千花や侍女達と和気あいあいとしていた時は過ぎて、今はお昼。千花をお昼に誘ったけど、ちょっと用があるからという理由で断られちゃった。……しょぼん。

「それより、はるかにはカレヴィ王に早く謝ったほうがいいよ」という千花の言葉を受け、わたしは侍女経由でカレヴィに昼食の誘いをしてみた。

それに対して、カレヴィはすぐにお昼の用意してある共同の間までやってきた。

「先程は俺を無視していたのに、どういいう見だ」

わたしと向かい合って座ったカレヴィは幾分機嫌悪そうにしていた。

……ありやゝ……。やっぱりわたし、彼の機嫌損ねちゃったんだ。カレヴィは王様だし、他人に無視されるということに慣れてないんだろうな。

そう考えれば、彼の機嫌が悪いのも分かる気がした。

「いや、それはやりすぎたよ。ごめんね」

慌ててわたしがカレヴィに頭を下げると、彼は不機嫌そうに言うてきた。

「おまえがそんなに簡単に自分の考えを翻すと言うことは、おおかたディカ殿に諫められでもしたのだろう」

うっ、カレヴィ鋭い。

思わずわたしが絶句していると、彼はふん、と皮肉げに笑った。む、感じ悪いぞ。

思わずむっとしかけたけど、これじゃいけないと思い直して言うた。

「……千花にカレヴィと仲良くやってほしいと言われたのは本当だ

よ」

「おまえはティカ殿の言うことなら聞くのか」

なんだ、やけにつつかかってくるなあ。

婚約者の自分が大事にされてないとも思ってるのかな？

「だって、千花の言うことはいちいちもつともだし。これから嫌でもずつと顔を合わせることになるんだから、少しはわたしも譲歩しなきゃと思ったんだ」

「……譲歩か。まあ、いい。食事が冷める。早く食べる」

わたしはカレヴィに大皿の料理を取り分けてもらったので、慌ててありがとうとお礼を言った。

「……ああ。そういえば、おまえは昨夜のことを侍女に言ったらしいじゃないか。なんでもおれは優しくなかったとな」

わたしはそれで、フオークにすくっていたポテトグラタンを皿にぽとつと落としてしまった。

これじゃ動揺しているのがバレバレだ。

ふと周りを見ると、わたし付きの侍女達は少々心配そうに、カレヴィ付きの侍女達は興味津々にわたし達の様子を窺っている。

「……ご、ごめん。そんなに気に障った？」

つい、興奮してその場にいたみんなにそれっぽいことを言っちゃったけど、カレヴィの耳に入っただのはやっぱりまずかったよね。

「当たり前だろう。そんなことくらい少しは我慢しろ。……おかげで俺は女心の分からない王というそしりを受ける羽目になったぞ」
そんなことくらいと言われて、わたしはかなりむっとしてしまった。

カレヴィのしたことは初夜じゃ考えられないし、わたしに無理させたことは本当のことじゃない。

それに、事実をみんなにぶちまけなかっただけでも自分を褒めてやりたいくらいだ。

「……事実じゃない」

わたしが小声で言うのと、カレヴィにじろつと睨まれた。

「なにか言ったか」

「……カレヴィは酷いよ。そんな言いぐさないじゃない。カレヴィはわたしがそれで体を壊しても構わないって言うんだね」

言いながら、思わずわたしはぼろぼろと涙をこぼしてしまった。

慌ててわたしはハンカチでそれを拭い、ごまかすようにポテトグ
ラタンを口にする。……熱い。

わたしはそれでまた涙目になる。

「そんなことは言っていないだろう。ハルカ、泣くな。……分かった。
俺が全面的に悪かった、許せ！ これでいいか！？」

最後の方はちよつとやけくそみたいに聞こえたけど、一応は謝つ
てるんだよね。……少しは反省しているならいいか。

「うん」

それでわたしはちよつとカレヴィに笑った。

すると、カレヴィはちよつと目元を赤くして、料理が冷めるから
早く食べると再度口にした。

それでわたしは、酸味の効いたソースがかかった鳥の唐揚げをナ
イフとフォークで切り分けて口にする。

「……恐れながら陛下、ハルカ様は慣れない環境におられるのです
から、あまり不安を煽られないようにお願いいたします。護衛の者
に伝え聞きましたが、ハルカ様はよく我慢なさったと思われますわ。
陛下は詳細を侍女達に知らされなかつただけでも良しとされなけれ
ば、ばちが当たります。陛下、どうかハルカ様を大切にされてくだ
さいませ」

侍女長のゼシリアがそう言ったので、わたしは思わずぎょつとし
てしまった。見ると、カレヴィも心なし青ざめている。

ひょつとして、ゼシリアには全部バレバレってこと？ 彼女の情
報網はいつたいていどうなってるんだ。

「……まいったな。ハルカはこの短期間のうちに侍女達を掌握した
のか。やりにくくてかなわん」

そう言いながら、カレヴィはソースのかかった茹で野菜をフォ―

クに刺して溜息をつく。

う、うーん。掌握とかは違うと思うなあ。

いうなれば、女心の分からないカレヴィの相手のわたしに対する同情心からだと思うけど。

でもわたしは、あえてそれをカレヴィには伝えなかった。

それにしても、おまえに泣かれると調子が狂う、と言って目元を染めて不機嫌そうに食事を進める彼がちよっとおもしろかったからだ。

……うーん、こうしてみるとわたしって結構いい性格してるかもしれない。

「あ、そういえば。今日の礼儀作法の授業が終わったなら、千花と向こうに行ってくるね。晚餐の時には帰ってくるから」

カレヴィに買い物やら、家に取りに行くものがあるからと言ったら、結構簡単に了承してくれた。

なにか言われるかなあと思っていたので、ちよつと一安心。

「だが、なるべく早く帰ってこいよ」

うん、まあこれくらいは言われるよね。

それにきつと心配してくれてるんだろっし、そう考えたらカレヴィって優しいな。

さっきの暴言はこれで帳消しにしておこう。

「うん、分かった。ありがと、カレヴィ」

わたしはにつこり笑って彼にお礼を言った。

でも、千花がいるからなにも心配することはないんだけどね。

そして、カレヴィとの昼食を終えて迎えた、礼儀作法の初授業。

ああ、一番恐れていた時間が来ちゃったよ。

千花からも、礼儀作法の先生は厳しいものと覚悟しておいた方がいいよ、と言われていたので内心どきどきだ。

でも実際に現れたのは上品で優しい感じの先生だった。名前はシレネだつて。

「それではハルカ様、立ったまましばらく静止してみてください」

そうシレネ先生に言われたので、わたしはその通りにしてみる。すると、シレネ先生の細かいチェックが入った。

「ハルカ様、頭が揺れてます。もう少し我慢してください」

そう言われながら、肩の位置やら、立ち方やらの矯正が入る。

……あ、さっきよりは大丈夫な感じ。

立ち方を直ただけで、結構違うものなんだなあ。

「……はい、今の姿勢がすべての基本ですから忘れないでくださいね。……それでは略式の礼の仕方に入ります」

略式の礼と言われて、わたしはこっちの礼の仕方をぜんぜん知らないことに気がついた。

…… 本当なら一番最初に習っておくべきものだよね、これって。

わたしは自分の悠長さに内心冷や汗が出る思いだった。

シレネ先生に教えてもらった略式の礼は、膝を軽く降り曲げつつスカートの両側を摘んで、小首を右に傾げるというもの。ちなみにこれは大陸共通のものだそうだ。

わたしはそれを何度か繰り返した後、ようやく合格点をもらえた。

「それでは少し休憩にいたしましょうか」

その言葉ですっかり安心してしまったわたしは、いつも通りテーブル席に腰掛けたら、シレネ先生から座り方のチェックを受けてしまった。

う、これも礼儀作法の一環なんだね。

その後も、カップの持ち方やらなんやら指摘されて、それも正すように言われた。

…… うーん、シレネ先生は礼儀作法の教師にしては優しい方なのかもしれないけれど、やっぱりチェックは厳しいや。

そして休憩という名の礼儀作法の時間がすぎて、本日のシレネ先生の授業は終了となった。

「今日習ったことの復習を忘れないでくださいね」

「はい、ありがとうございました」

シレネ先生の礼に、わたしは習った略式の礼で返す。

先生に何も言われていないので、たぶんうまくできているはずだ。わたしはシレネ先生を笑顔で見送った後、こっそりと溜息をついた。

一応、あっちでは事務職で接客することもあったから、そういうセミナーを受けたことはあるんだけど、やっぱり一回二回の付け焼

き刃じゃ駄目か。

そこで、テーブルマナーや礼の復習はカレヴィに見てもらいながらやるうとわたしは決意する。……王であるカレヴィなら作法に関しては完璧だろうし。

そんなことを思いつつ、長椅子に座ってくつろいでいたら千花がやってきた。

これからあっちの世界で足りない画材の買い物があるのだ。……

千花、お世話になります。

ちなみに、千花に礼儀作法の先生は割と優しくかったと言ったら、ずるーい、と返された。なんだ。

……ひよつとしたら、千花の礼儀作法の先生は余程厳しかったのかもしれない。

それから千花にカレヴィとの例の夜の一件を話しておいた。

そしたら千花は「……ありえない」とショックを受けたようだった。

カレヴィとの仲を千花が取り持ったようなものだし、悪いこと言っちゃったかなあ。

でもその他の条件はすこぶるいいんだから、それくらいはわたしがちよつと我慢すれば……、う、うーん、我慢できるかなあ……。今更ながら不安になってきた。

わたしは百均と画材屋で画材をしこたま買い込んだ後、スーパーに寄ってスナック菓子やお煎餅を千花と二人でたくさん買った。

「向こうはお菓子って言ったら、甘いものだもんね。だから時々塩気の利いたものが無性に食べたくなるよ」

千花のその言葉に、確かにあっちでは甘いものしか出てこなかったなと思いつ。

とりあえず、今日買ったお菓子は明日のお茶受けに出してもらうことにしよう。

カレヴィやイヴェン又達も珍しがるだろうな。ふふ。

わたしは大量の買い物袋を下げ、ザクトアリア城に戻り、そこで千花と分かれた。千花、今日は（も？）ありがと。

わたしが城に着いたのは既に晚餐の時間に近かったんだけど、カレヴィは共同の間にも部屋にもいなかった。

まだ執務なのかなと思ったけど、ゼシリアが言うには謁見の間で貴族達と会っているそうだ。

「ハルカ、やっと帰られましたか。すぐに着替えられて謁見の間まで来てください」

荷物を置いてちよつと一休みしようとしていたら、なぜかシルヴィが現れた。

いや、彼と会えるのは嬉しいけどさ。わざわざ彼が来るってよっぽどのことなんじゃないの？

わたしは不安になりつつも、急いで支度をしてシルヴィの後についていく。

わたし達が謁見の間の控えの間に入ると、シルヴィに片手を差し出された。

それをわたしはおずおずと取ると、シルヴィに先導されて謁見の間の王妃の席がある場所まで連れてこられた。

……これはここに座れてことなのかな？

ちらりとカレヴィを窺うと、彼は肯定するように頷いた。

席に腰を掛けると、シルヴィが数歩退いて静止する。

落ち着いて周りを見てみると、貴族らしい人物が五名程怒りの表情でこちらを見ていた。

……え、え？ これはなに？

なんでわたしは見ず知らずの人達に敵意も露わに見られているの？

「これはこれは、こちらが陛下の婚約者殿ですか。これはまた……醜女をお選びとは陛下もお遊びが過ぎますぞ」

いきなり悪意を浴びせられて、わたしはびつくりしてしまった。
しかも、会ったばかりの人間のことを醜女って酷すぎない？

「いきなりなんだ、バルア侯爵。それにハル力は醜女などではない」
隣のカレヴィが不愉快そうに顔をしかめる。

「しかし、わたくしの家の姫はその者が足下にも及ばないほど美しいですよ」

「わたしの姫もです」

「もちろん、わたくしの姫も」

「我が姫も負けませんよ」

「なんの、わたしの姫は花のように美しい」

口々に貴族のおじさん達がわたしを汚らわしいものでも見るかのようにして、自分の娘を自慢する。

「無礼な。ハル力は兄王が選んだ女性だ」

シルヴィが憤慨して、貴族のおじさん達を睨みつける。

ああ、わたしのために怒ってくれてるんだね。いい子だなあ。

「俺は花嫁に美しさなど求めてはいない。……それにハル力はあの最強の女魔術師の親しい友人だ。これほどの良縁もあるまい」

ちよつと酷い言いようにも聞こえるけど、カレヴィにしたらこれが事実なんだろうな。

まあ、わたしも趣味三昧のために彼の王妃になることを決めたんだから、おたがいさまだ。

「しかし……！ この者は異世界の卑しい出ですぞ！」

「そうです！ 陛下がディアルスタンの王女と婚礼を挙げられると伺っていたからこそ、我々も堪え忍んできましたのに……っ」

確かにわたしはただの庶民だ。

それに隣国のリリーマリー王女の代役でカレヴィの婚約者になったから、王妃にふさわしい気品なんかも全然ない。

わたしが思わず下を向くと、カレヴィがおとんとおかんに謁見した時みたいにわたしの手をそつと握ってきた。

それで、思わずわたしはカレヴィの顔を見返してしまふ。

「——なにを言うか。このハルカはそこらの姫とは比べものにならないくらい良い女だぞ」

……はあ？

この事態にカレヴィがどうにかしちゃったのかと思って、わたしは思わず惚ける。

見ると、シルヴィもあつけに取られているじゃないか。

対する貴族のおじさん達も笑いを堪えるような表情をしている。

「陛下、ご冗談を……」

「冗談ではないぞ。昨夜のハルカとの習いは最高だったぞ。それも今まで抱いたどの高級娼婦よりもな。おまえ達の姫がハルカにかなうとはとても思えんがな」

ちよつ、カレヴィいきなりなにを言い出すかー！！

わたしはびっくりしすぎて思わず席を立ててしまった。

シルヴィも真つ赤な顔でこつちを見てるし。うっ、気まずい。

「なつ、なつ、な……っ」

貴族のおじさん達もカレヴィのあまりの発言に顔を真つ赤にしている。

あれは怒りのためだろうか、それとも羞恥かな？ ……たぶん、両方だろう。

「分かったら帰れ。いい加減目障りだ」

冷たくカレヴィに告げられた貴族のおじさん達が、その身を屈辱に震わせながら声を張り上げる。

「わつ、わたくし達はまだ諦めませんぞ！」

「必ずや卑しい娘から陛下をお救い致します！」

……ちよつと、それじゃわたしがカレヴィをどうにかしているみたいじゃない。

どっちかっていうと、わたしはカレヴィの方をなんとかしたいと思ってるって言うのに。

その他、叫びたいだけ叫んで、貴族のおじさん達は鼻息も荒く謁見の間から出ていった。

途端に静かになった謁見の間で、わたしはカレヴィの前に立つ。

そして腰に手を当て顎を少し上げた。

「……ちよつと聞いていい？」

「……なんだ？」

ちよつと偉そうなわたしに、カレヴィがちよつと引き気味になる。こんなことより、さっきのカレヴィの発言の方がよっぽど引きでしようがあっ！

怒鳴りつけたいのを堪えつつ、わたしはなるべく静かに彼に尋ねる。

「花嫁候補の姫って他にもいたんだ？」

「いや……、あれはやつらが勝手に言っていることで、俺にはその気はない」

でも、その気になれば妃はいくらでも娶れるんだよね。

わたしは昨夜の苦労を思い出して、思わず震え出す。

それをどう勘違いしたものか、カレヴィが焦ったように言った。

「どうした、ハルカ。俺は、おまえ以外の妃は娶らないぞ。だから、おまえが王妃だ。安心しろ」

そう、なら安心……できるかーっ！

カレヴィがああ調子で、わたしがずっとその相手をする事になるかと思うと、目の前が暗くなるような気がする。

カレヴィもめんどくさがらずに妾妃を二、三人くらい娶ってくれば、わたしは体力の限界に挑まなくてもすむんだよね。

そしたらああ貴族のおじさん達に変に敵視されずにすむかもしれないし。

……などと、わたしは千花が聞いたなら「甘い、甘すぎる！」と突っ込みが入りそうなことをつらつらと考えていた。

「ほんとに信じられないっ！」

いろいろと考えている内にさっきの羞恥を再び思い出してしまったわたしは、カレヴィとシルヴィしかいなくなつた謁見の間で、年甲斐もなく真つ赤な顔で地団駄を踏んでいた。

「ハ、ハルカ落ち着け」

わたしの荒れようにカレヴィが慌てたように立ち上がる。シルヴィもわたしに近づいてきた。

「気持ちはずかりますが、ハルカ落ち着いてください。淑女らしくないですよ」

十歳以上年下なシルヴィに諫められて、わたしは自分が随分と大人げなかつたことを恥じた。

……でも、やっぱりカレヴィのことは許し難い。

「今日は夜の習いしない！」

わたしのその叫びにカレヴィはかなり驚いたようだった。

「なにを言っている。そんな勝手が許せるか。それに、あれは褒めたんじゃないか。なのに、なぜ怒る」

……あれを褒めたつて言えるカレヴィおかしすぎるよ。

「あの言い方じゃ、まるでわたしがカレヴィを惑わしてるみたいじゃない。カレヴィ、酷すぎるよ」

そう言ってるうちに、羞恥からじわりと涙が浮かんできた。

「ハルカ」

シルヴィが心配そうにわたしに腕を延ばしてきたけど、はつとしたりよにその手を引つ込めた。

……なんだろう。ひよつとして慰めようとしてくれたのかな？

「兄王申し訳ありません。出過ぎたまねをしました」

「……まあ、いい。だが、ハルカは俺の婚約者だということを忘れるな」

「はい」

今度はカレヴィがわたしに腕を延ばしてきて涙を拭おうとした。

……あ、あれってこういうことだったのか。

だけどわたしは、カレヴィの腕をはねのけ、彼から数歩下がって自分で涙を拭った。

「……ハルカ、その態度は可愛くないぞ」

カレヴィがむっとして言うてくるけど、わたしはまだ彼に怒っていた。

「カレヴィが悪いんでしょ。あんな恥ずかしいこと言うから。あの人達、わたしのことまるで悪女かなにかみたいに言うてたじゃない」
あの人達が言うように、わたしは確かに美しくない。でも、この体は信じられないことにカレヴィにとってはとても貴重なものらしいのだ。

でも、それを自分の姫を売り込みたい貴族の人達に誇示するように言うなんて酷すぎるよ。

あれじゃ、無駄に敵を増やすだけじゃないか。

わたしはもつとひっそりと王妃業しながら趣味に浸りたいのに。

わたしがまだ真つ赤な顔でカレヴィを睨んでいると、彼は仕方なさそうに溜息をついた。

「……悪かった。俺の考えがなさすぎた。ハルカ、頼むから機嫌を直してくれ」

謝ってきてても、そんなに簡単には許さないからね。

わたしの平穏な日常を壊すような真似をしたカレヴィは、もつと根本的なところから考え直したほうがいいと思う。

あれが、人前で言うていい言葉かどうかぐらい、普通分かるでしょうが。……あ、王様だから分らないのか？ でも、王族のシルヴィは普通にあれが非常識な会話だと理解しているみたいだし。

うん、やっぱりカレヴィがおかしいんだ。

結局そういう結論に落ち着いて、わたしはカレヴィの懇願にも黙っていた。

「ハルカ、俺からも頼みます。どうか機嫌を直してください」
う、シルヴィにそう言われちゃうと、決意が鈍るな。

あんまり意固地になって、彼に悪印象持たれたら嫌だし。

……仕方ない。ここは彼に免じて、カレヴィを許しちゃうか。

「……分かったよ。でも、カレヴィはもう人前であんなこと言わないで。わたしはすごく恥ずかしかったんだからね」

「ああ、すまない」

軽く返してくるカレヴィにちょっと、いやかなり不満を感じる。

——本当に分かってるのか、この男は。

わたしは頭が痛くなりながらも、シルヴィの再三のフォローを受けて、仕方なくカレヴィを許した。

心配してくるシルヴィの顔を立てるために、今回は許したんだからね！ そのところは勘違いしないでよね。

それでとりあえず、時間も遅くなったことだし、晚餐ということになった。

わたしがシルヴィも一緒にと言ったので彼も同席している。

義弟として仲良くなる機会をどんどん作って行かなくちゃね。ふふ。

その席で、カレヴィに礼儀作法の授業のことについて聞かれたので、わたしはその内容をざっと説明した。

「千花に礼儀作法の先生は厳しいから覚悟しておいた方がいいって聞かされてたからどうなるかと思ってたけど、実際は優しい先生でよかったよ」

ステーキを切り分けながら笑顔で言うと、カレヴィがとんでもないことを言いだした。

「そうか。……おまえにはもっと厳しい教師を付けた方がよかったか？」

「え、えっ？ いや、今のままで結構です！」

「……冗談だ」

見ると、カレヴィはおかしそうに口元を押さえている。

「うう、おもしろがられてるよ、わたし。ひょっとして、これはさっきの仕返しかな？」

「けれど、ハルカと教師の相性が良さそうでよかったですね。よい信頼関係を作っていくのも作法を教わるには大事です」

「うん、そうだね」

それは本当にそう思う。

チェックは厳しいけれど、優しくて信頼できる先生だし、わたしは本当に運がいい。

シルヴィににこにこしながら、わたしは頷く。

「なんだ、ハルカはシルヴィには随分と愛想がいいんだな」

意外そうに眉を上げてカレヴィが言ったので、わたしは素直に話した。

「わたし、弟が欲しかったから、シルヴィとは仲良くなりたいんだよね」

「そ、そうですか……」

シルヴィがわたしの言葉を受けてちよつと困ったように頷く。

あれ、迷惑だったのかなあ……。

「まあ、程々にしておけよ。それこそ、先程のやつらに妙な噂を立てられかねん」

ええ？ 弟として仲良くするだけなのに、そんな心配をしなきゃいけないなんてかなり残念すぎる。

「これだけ歳が離れていたらそんな気になるはずなのにねえ。わたしにはシルヴィは可愛い弟みたいに思えるけど」

まあ、公式には二十歳ということになってるから、あの貴族のおじさん達にそう言えないところは苦しいかな。

すると、シルヴィがいかに気分を害したとでもいうように、むつとした顔をしてきた。

あ、あれ……？

「失礼ですが、俺はもう成人してるんです。あなたの相手として

噂される可能性はいくらでもあるんですよ。それなのに、そんなことを言われるのは心外です」

あ、そうだった。ここでは十五で成人なんだった。

だから、その可能性は確かにあるんだよね。わたしからしたら、それが犯罪的行為だとしても。

「ご、ごめんね。シルヴィのプライドを傷つけるつもりはなかったんだ。許してね」

わたしが頭を下げた謝ったら、シルヴィはちよつと息をついて、首を横に振った。

「……俺も言い過ぎました。ただ、本当にやつらに妙な言いがかりをつけられるようなことには気をつけてください」

「う、うん、分かった。気をつける」

なんだかわたしもカレヴィを怒るような感じじゃなくなってきたな。

シルヴィとは仲良くしたいけど、本当に気をつけないと。……けどその程々具合が難しいんだよねえ。

わたしはちよつと息をついた後、気を取り直すようにカレヴィに礼儀作法の復習のことについて言ってみた。

「ところで、礼儀作法の先生に今日習ったことの復習してくださいって言われたんだよね。だから、カレヴィ後でわたしがきちんと出てくるか見てほしいんだけど」

「ああ、いいぞ。しっかり見てやる」

それまでシルヴィとのやりとりを黙って見ていたカレヴィが、わたしのそのお願いに笑顔で快諾してくれた。

うーん、カレヴィ、いい人だ。……時々かなり非常識だけど。

「その代わり、おまえには夜の方も頑張ってもらうぞ」

……結局そのオチか！

恥ずかしげもなく言うカレヴィに、ウブなシルヴィが真っ赤になる。

カレヴィ、さっきのこと全然反省してないじゃない。

いい人と思つたのは撤回。カレヴィは王様の皮を被つた野獣だ。

「……なら、侍女達に見てもらうからいいよ」

昨日みたいなこと、また繰り返すのは耐えられない。

わたしの体力だつて限界つてものがあるんだぞ。

「礼儀作法なら俺が見た方が確実だぞ。遠慮するな」

そんなこんなでカレヴィに押し切られたわたしは、礼儀作法の復習を彼に見てもらうことになった。

シルヴィはあの話題に引いたのか、食事もそこそこに、そそくさと帰ってしまった。

……彼には本当に悪いことしちゃったなあ。これもあけすけすぎるカレヴィが悪いんだ。

でも、カレヴィの礼儀作法は完璧で、確かにその人選は間違つてなかつただけだ。

「……約束は守ってもらうぞ」

とかなんとか言われて、寝室で彼にのしかかられてしまった。

……よくよく考えたら、復習を見てもらうのはシルヴィでも良かったんじゃない？ 彼も王族で礼儀作法は完璧なはずだし。

そうカレヴィに言ったら、なぜか急に不機嫌になつてアレを何回も付き合わされることになつてしまったのだった。

……本当に、なんでなんだ。

020 喪女と野獣

――外が明るい。

「……ハルカ、朝だぞ」

耳元でゾクゾクするような美声が響く。

こないない声の知り合いなんかいたっけ、とわたしは寝起きの働かない頭で考える。

ふと、隣で人が起き出す気配がした。……ああそうだ、カレヴィだ。

段々頭が冴えてきたけど、わたしはシートにくるまったまま彼を観察する。

初めて会った時もあったけど、本当に美形だよね……。

それに、浅黒い体は引き締まっていて、すごく綺麗な筋肉の付き方をしている。

腹筋とか割れてるし、ああ、今すぐカレヴィをデッサンしたい。ああ、なんでスケッチブック置いとかなかったのかな、わたし。今夜からはちゃんと用意しておこう。

それでいろいろポーズ取ってもらうんだ。

「……カレヴィ」

自分で思っていたよりもけだるい声が出て、それにカレヴィが反応する。

「なんだ」

「カレヴィって、いい体してるよね」

褒めたのにカレヴィは目をむいて絶句。

……あれ？ わたしはなにかいけないことでも言ったんだろうか。

「……おまえは俺を誘っているのか？」

「えっ、えっ？ 違うよ、綺麗な体だからデッサンさせてもらおうと……んうっ」

皆まで言わないうちにカレヴィが覆い被さって、わたしに口づけしてきた。

彼の舌がわたしの唇の間から侵入してきて、逃げようとする舌を捉えられた。

「ん……っ、ちが……、ご、かい……っだって……ば」

口腔内を犯されて頭がぼうつとしてくるけど、それでもなんとかそう言った。

このままでは二日連続で朝からされてしまう。

「……そうだとしても、もう遅い。ハルカ、覚悟するんだな」

カレヴィはふつと笑うと、今度は唇に軽いキスをしてきた。

ええー、嫌だよ朝っぱらから。

そして、カレヴィはわたしにかかっていたシーツをはぎ取ると、嫌がるわたしを無理矢理襲った。

それからしばらくして、わたしはカレヴィと一緒に共同の間で朝食を取っていた。

「……もう、信じられない。嫌だって言ったのに」

二日連続で朝からやられてしまったわたしは、またも不機嫌だった。

「すまない。ハルカがそんなに嫌だとは思わなかったんだ」

実はカレヴィは、わたしが誘ったものの、照れて嫌がっている振りをしていると思いこんでいたらしい。

「それに、なんで朝っぱらからの？ 夜さんざんしたじゃない」
「かったるいし、また腰も痛い。」

でも、礼儀作法の授業で動けないのはまずい。一応腰に湿布をし
てあるけど、時間までに痛みが引けばいいんだけど。

まったく、加減ということを知らないのか、この男は。

「……それは朝だからだ」

「……はあ？」

カレヴィの気まずそうな言葉に、わたしは一瞬目が点になる。

「朝……？ ……ああ、分かった。そういうことね」

そこでようやく、カレヴィの言いたいことが分かったわたしは納得して頷いた。

でもアレって放っておけば元に戻るんじゃないの？ わざわざわたしとやることもないのに。

「……そんなに持て余してるなら、娼館の人を呼んで相手してもらったら？ いくら花嫁修業とはいえ、毎日こんな調子じゃわたしの体力が持たないよ」

カレヴィがわたし以外の妃を娶らないと宣言している以上、野獣をおとなしくさせる解決策はそれくらいしか思いつかない。

なにせわたしは、特に運動もしていないただのオタクな女なのだ。ただ、昔から体だけは丈夫で、滅多に風邪も引かないんだけどね。それに対して、カレヴィはちょっとむっとしたように言い返してきた。

「おまえという婚約者がいるのに、そんな不実な真似が出来るか」

……これ、聞く人によっちゃ、感動ものの台詞なんだろうな。

現に部屋の隅に控えていた年若い侍女達がきゃあつ、と嬉しそうな声を上げている。

だけどわたしはそれに動じることもなく、焼きたてのパンにバターを塗っていた。……ごめんね、こんな枯れた女で。

でもそうになると、こんな毎日がこれからも続くってことだね。

本当に、頼むから程々にしてくれないかなあ。

「……そういえば、こういうこととして婚約期間中に子供が出来たりしないの？ それって、あんまり外聞がよくないような気がするんだけど」

わたしは常々聞こうと思っていた質問をカレヴィに投げかける。
まあ、一ヶ月くらいなら誤差の範囲だって言って、ごまかせるかもしれないけど。

「おまえは知らなかったのか？ この期間中は俺が避妊の薬を飲んでいるから、子は出来ない」

……なんと。

初めて知らされる事実には私は目を見開いた。

なんで、夜の習いとか、避妊薬のこととか、誰も教えてくれないかなあーっ。

もしかして、みんなはカレヴィが既にわたしに伝えているものと思ってるのかもしれない。

カレヴィが言うには、この期間は婚約中の二人のお楽しみ期間でもあるんだって。……でも、主に楽しめるのはカレヴィのような気がしないでもないけど。

「ふーん、そうなんだ。まあ、朝からこんな話題もなんだし、もうやめるね」

わたしがそう言ったら、カレヴィは明らかにほっとしたような顔になった。

カレヴィ、昨日の再現になるとでも思っていたのかな？ でもいくらわたしだって、同じ過ちは繰り返さないよ。

わたしはふわふわのオムレツを味わいながら、そんなことを考える。

「ハルカ、この食事が終わったら庭園に散策にでも行かないか？

確か王宮の外を見たことはなかっただろう」

……そう言われてみれば、見たことない。

カレヴィが急にこんなことを言い出したのは、朝のアレの罪滅ぼしのつもりなのかなあ。

ここに来て日も短いし、わたしはインドア派だから特に気にしたこともなかったけど、でも、せっかくカレヴィがこう言ってくれてるんだし、断る理由もない。

それでわたしが頷くと、カレヴィは楽しみにしておけ、と爽やかに笑った。

この笑顔だけ見ていたら、実は夜は野獣だなんて誰も思わないだろう。

……なにを隠そう、わたしもこの笑顔に騙された口だ。

千花あたりも、わたしからカレヴィの生態を聞いて驚いていたから、普段は出来る王様なんだろう。

……それが、夜の時だけアレなのはなんでなんだ。

それに変に義理堅くて、妾妃や娼婦を相手にするのは嫌だと言ってくる。

そして、どうやらそれを聞いたわたしが喜ぶと思っている節があるんだよね。……まあ、日本が一夫多妻制じゃないって聞いていることもあるんだろうけど。

おまけにカレヴィはなんだかわたしの体を気に入っちゃってるみたいだし、本当に彼の趣味が分からない。

子供を作るのは契約だからまだいいとして、こんなハードなのは全然求めてない。はつきり言って、王妃になる前からオーバーワークだ。

——そうだ。今度、千花に精力減退の魔法薬でもないか聞いてみよう。うん、そうしよう。

わたしはそこまで考えて、カレヴィにつこり笑った。

……傍目には婚約者同士仲良く話しているように見えるかもしれない。けれど、その一方が考えていることは、ちよつと不穏なことだった。

021 思わぬ副産物

カレヴィに庭園に誘われたのはいいんだけど、そういえばわたし腰が痛いことをすっかり失念してたよ。

それで、そのことをカレヴィに言ったら、すぐに王宮付きの魔術師を呼ばれて治癒魔法をかけられた。

「ティカ様ほど完璧にはいきませんが、これでいくらかは痛みが引かれると思います」

「ありがとうございます」

その魔術師に言われた通り、少し痛みは残るけど、だいぶ楽になった。これなら庭園に行けそうだ。

ちなみに治癒魔法って言うのは、完全に治癒させるものじゃなくて、正式には「治癒させる為の魔法」って言うんだって。

千花みたいに完璧に治癒させるのは、むしろ一般の魔術師的にはものすごく非常識な部類に入るらしい。

「……ですが陛下、ハルカ様にあまりご無理なことをなされないようにお願いいたします。治癒魔法もあまり頻繁には使えません故」カレヴィに苦言を呈した魔術師曰く、痛いからってあまり治癒魔法に頼っていると、人体本来の治癒能力が鈍ってくるからなんだそう。

……それなら、仕方ない。次からは湿布と痛み止めで我慢しよう。痛み止めっていても、ここのは薬湯だから飲み続けても大丈夫らしいし。

本当はカレヴィが自重してくれるのが一番いいんだけどね。

千花に会ったら、例の精力減退の薬があるか確認しておかなきゃ。

「……ああ、分かった。一応頭に入れておく」

「一応じゃなくて、ちよつとは自重してよね」

本当に分かってるんだかどうか分からないカレヴィにわたしは文句をつけたけど、ここまで言っても夜には忘れられてそうだな

あ。……カレヴィ、鳥頭か。

ああ、と言ったカレヴィの目が泳いでるのも怪しい。

「……まあ、それはともかく庭園まで移動させてくれ。ハルカの体のこともあるしな」

む、ごまかしたな。

そもそも今、わたしの体を気遣えるんだったら、夜にセーブして欲しい。

けど、なんでカレヴィがわたしの体にそこまで執着するのか本当に分からない。

カレヴィは貴族のおじさん達に、どの高級娼婦よりもわたしが最高だったって言ってたけど、ひょっとしてあれは真実だったってことなのかな。

貴族を追い払う名目で言ったのかと思ってたけど、わたしの体つて、カレヴィの好みになりに合っているのかもしれない。……一応、わたしは巨乳と言われるし。

でも高級娼婦の人に、そういう人はいくらでもいそうなんだけだなあ……。

そここのところをカレヴィにはつきり聞いてみたいけど、今朝みたいに誘われてると思われたらたまったもんじゃないし。どうしたもんだろう。

……でもまあ、カレヴィには折りを見て聞いてみよう。ちょっと聞くのにも心構えがいるけど。

わたしがそんなことを思っている内に、カレヴィに命令された魔術師は頷いて、わたしとカレヴィ、それにお付きの者達を庭園の入り口まで移動させた。

カレヴィに案内されたのは、南国ムード溢れる庭園だった。

南国の植物が茂っているそばに人工の川やら噴水が絶妙に配置さ

れていて庭園自体が涼しくなるように配慮されているみたいだ。

それでも、快適な温度だった王宮内と違ってここは少し暑い。

「ちよつと暑いね」

額に浮かんだ汗をハンカチで拭いながらそう言つと、カレヴィはいつもと変わらない涼しい顔で肩を竦めた。

「この国の気温はこんなものだ。……城の中は魔術で快適な温度に保つてある」

ふーん、常時クーラーが作動しているようなものか。

こんな快適な環境で趣味に浸れて、最強の魔術師が友達で、王の婚約者としてみんなにかしずかれてる。……わたしがつくづく恵まれてるよなあ。

元はただの一般庶民のわたしは、ザクトアリアの国民に対してちよつと罪悪感を感じてしまう。

そう考えると、貴族のおじさん達がわたしに反発していたのも分かる気がする。

それでわたしが少し溜息をついてると、カレヴィが「どうした」と聞いてきた。

わたしがさっきの自分の考えをカレヴィに話すと、彼はわたしの肩を抱き寄せて笑った。

「おまえが気に病むことはない。おまえは王妃の務めを果たすことだけ考えていればいい」

「……うん」

王妃の務めつていたら、まず子作りだよな。

カレヴィがああ調子だったら、結婚してすぐできるかなあ。できるといいな。……体力的にちよつと大変そうだけど。

そんなことを思いつつ庭園を見回していたら、巨大な黄色い房が垂れ下がっているのが目に入った。

……これって、もしかしてバナナ？

付いてきていた庭師の説明によるとやっぱりバナナで、鑑賞用に植えてあるそうだ。でも本来は食用の品種なので食べられるんだっ

て。

ネットでバナナの房が巨大とは知ってたけど、実際に目にするとなんか感動するなあ。

わたしの住んでいる地域は、バナナ育ててる人いないしね。

「へえ……」

わたしは食べごろサインの黒い斑点、いわゆるスイートスポットの出ているバナナを房から一本もぐと、皮を剥いて食べてみた。

うん、濃厚な甘みがあつてとってもおいしい。

にこにこしながらバナナを食べるわたしをカレヴィは最初呆気に取られて見ていたけど、なにか変だったかなあ。

それに、次にはなぜか彼がにやけていたみたいなのも気になった。

……なんか妖しいぞ、カレヴィ。

「おいしいよ」

でも、わたしはバナナをもう一本房からもいでカレヴィに渡すと、彼は仕方なさそうに苦笑した。

「……ああ、確かにうまいな」

わたしと同じようにバナナにかじりついたカレヴィもちよつと驚いたように瞳を見開いた。

彼も観賞用のものとは思えないおいしさにびっくりしたらしい。

「でしょ？ これ少し持って帰っていいかなあ」

わたしがそう言ったら、庭師が気を利かせて房の一部を切り落としてくれた。

「ハルカ様、よろしかったら他にも果物がありますよ」

庭師はわたしがバナナをおいしいと言ったことが余程嬉しかったらしく、パイやアップルマンゴーなんかを山ほど取ってくれた。ふふふ、庭師の人、気が利きすぎで嬉しいぞ。

他にもいろいろ種類はあるらしいけれど、それはまた、次の機会でもいいかなと思って、今日はこの辺でやめておいた。

とりあえず、これは今日の食後のデザートにしよう。

でも、ちよつと量が多いかなあ。まあ、後でモニー力達や近衛兵

に分ければいいか。

にやにやしながら大量にゲットした南国フルーツを見ていたら、カレヴィがちよつと呆れたように言った。

「おまえは庭園に散策に来たのか？ それとも果实狩りに来たのか？」

「え？ もちろん散策に来たんだよ」

思わぬ副産物で、果实狩りもできたけどね。

でも、果实狩り出来る庭園なんて貴重だよねえ。わたしも漫画でそんなの描いたことないぞ。

それに、せつかく庭師が丹誠込めて作ってるんだから、これを食べずに捨ててしまうのはもったいない。

これは、これからもつと庭園の有効な使い方をカレヴィとも相談しないとね。

022 見学希望

とりあえずゲットした南国フルーツは厨房に届けて昼食に出してもらい、残った分は今いるみんなに分けることにした。

そして引き続きわたしはカレヴィと南国ムード溢れる庭園を巡った。

よく見ると庭園には色鮮やかな鳥達もいて、それに負けない色彩の花々と相まってとても素敵だった。

うーん、こういうのを見ると、本当にザクトアリアが熱帯性の気候の国なんだなあって実感が湧いてくる。

うん、かなり異国情緒満点だ。

こういうのを実際目にとると、この世界の本で見た、ザクトアリアは他の国よりも気候及び文化が特殊っていうのもなんとなくだけで理解できた。

そして、次にカレヴィに案内されたのは、薔薇の花とかが咲き乱れる庭園だった。

「あ、涼しい」

ここはさつきと違って魔法が効いているのかな？

そう思ってたなら、カレヴィがそれを肯定してくれた。

「ああ、ここは城と同じような気温になっている。花の管理にはもっと複雑な魔法を使っているらしいが」

そう言われてみれば、この庭園には薔薇の花の他、いろいろな季節の花が咲き乱れていて、桜まで咲いている始末。……いや、綺麗だけどさ。

薔薇と桜と一緒に咲いてるのは、日本人の感覚からしたら、ちょっと異様に見える。

それを直接言うのはなんだだったので、濁しつつそれを伝えたら、カレヴィはそういえばおまえの国には四季があるのだったな、と肩

を疎めた。

「この庭園は、ガルディア王国のものを模して作ってある。あそこは一年中春だからな」

へえ、千花がいる国ってそんななんだ。

それにしてもこの世界の気候ってどうなってるんだろ。まさにファンタジー。

「過ごしやすそうだね」

人が住むには少々暑いザクトアリアの王であるカレヴィはどこか憧憬をこめた瞳で頷いた。

「ああ、そうだろうな。ガルディアは大陸一の魔法大国で教育体制も整っている。おまけに特出した魔術師が二人もいる。大陸中の人間が移住したいと思っている国だろう」

「ふーん、この大陸の人には憧れの国ってことかあ」

「それにガルディアは魔術師団もさることながら、騎士団が近衛含めて三つもある。……ガルディアは魔法大国と言われているが、他の軍備も群を抜いている」

騎士団が三つ！？

騎士が出てくる漫画を描いているわたしは、思わずその言葉に反応してしまった。

「えっ！？ そうなの？ だったらぜひ、その騎士団を見学してみたいなあ」

うまくいけば漫画のネタになりそう。

カレヴィがガルディア王国のことをあんまり褒めるので、かなり興味を引かれてそう言ったら、彼にがしつと肩を捕まれた。

ちよ、ちよつと痛いよ。

「駄目だ」

「なんでよ」

カレヴィの上からの言葉に、わたしは思わずむっとして言い返す。「おまえは俺の婚約者なんだぞ。いずれ王妃になる者が気安く他国に出かけるな」

う、まあ、それを言われちゃうと苦しいけど。

「じゃ、じゃあ変装して行くっていうのはどう？　これなら婚約者
ってばれないでしょ？」

日本人独特の顔立ちではれるってことも考えられるから、そこは
千花の幻影魔法でごまかしてもらおう。

「あそこの王弟は鋭いぞ。もしばれたらどうする」

その王弟って人は怖い人なのかな？　弱味を握られると国として
後々困るってこと？　うーん、それはまずいかも。

……でも行きたい。

「なら、こっそり行けばいいじゃない。……千花がいればどうにか
なるって！」

困った時の千花頼み。……千花にはいい迷惑だろうけど。

「……おまえはティカ殿、ティカ殿と……まあ、いい。騎士団と言
えば聞こえはいいが、要はむさい男の集団だぞ。そんな中に俺の婚
約者を放り込む真似ができるか」

……さっきは褒めてたのに、今度はむさいときたか。どっちなん
だよ、カレヴィ。

カレヴィは強硬に反対するけど、その理由、狼の群に羊を送り込
むみたいな例えだな。

カレヴィ、見学するくらいで大袈裟すぎる。

「だから千花がいるから大丈夫だって！　紹介くらいしてもらって
も別にいいじゃない。減るもんじゃなし」

「減る」

なんだその答えは。お子様が。

「けーち」

対するわたしも随分と大人げない反応で返してしまった。

しばしわたしはカレヴィと睨み合う。

せっかくの生の騎士を取材する機会を逃すなんてもったいないこ
と、わたしには出来ないよ。

やがてカレヴィがわたしから目を逸らさずに言った。

「いくらティカ殿がいたとしても、駄目なものは駄目だ。どうしても行きたいと言うなら俺を連れていけ」

「ええ!？」

わたしはびっくりしすぎて思わず飛び跳ねちゃったよ。

ひっそりとお忍びで「騎士団のファンなんです」とか言って彼らを見学して、うまくしたら騎士道や普段の鍛錬について話せたらなあとかわたしは思ってた。

それが、王であるカレヴィがついてくるって、いったいどういうこと？

わたしはカレヴィの婚約者だけど、まだ王妃じゃないんだよ？

それなのに、そんなことされたらこっちが困る。

そんな大事になったら、ガルディアにザクトアリアの重要人物として扱われることになって、騎士に突っ込んだこと聞けないじゃないよ。

「やだよ、そんな大袈裟にするの。そんなことしたら、いろいろとめんどくさいじゃない」

カレヴィは、わたしのこんな騎士云々の話でわざわざガルディアに公式訪問なんて面倒じゃないんだろうか。

そもそもガルディアへ訪問するのに、どんなふうに説明するの？まさか、婚約者が異様にこちらの騎士団に興味を持っていますなんて、本当のことは言わないだろうけど。

うん、カレヴィが王としてガルディアの騎士団の体制に興味があるとかというのが理由としては自然かな。

でもでも、そんなのやだよ。

わたしはろくに礼儀作法も出来ていないのに外交デビューなんて「なら諦める。それ以外は認めん」

カレヴィから冷たく言われて、期待に胸を膨らませていたわたしはかなりショックを受けた。

……うう、そんなあ。

でも、カレヴィ頑固そうだし、騎士団取材は無理そうだ。

「……分かったよ。騎士団のことは諦める」

仕方ない。騎士団に関しては、千花に聞くだけにとどめよう。

「分かればいい。おまえは今は婚礼の準備期間だということを忘れるな。それを理解していればそんな軽はずみなことは言えないはずだ」

「うん、ごめん……」

彼の言う通り、今は凄く忙しい時期だ。確かにそんなことをしている暇があるとは思えない。

でも、一時間くらいでも取材させてくれればだいぶ今後の為にもなると思うんだけどなあ……。

わたしがもの凄くがつくりしていると、カレヴィは良心が咎めたのか、「後でおまえの部屋にガルディアの騎士に関する本を届けさせる」と言ってきたけど、わたしが会いたいのは生身の騎士なんだよ。わたしがそう言ったら、カレヴィにすかさず反対された。

「生身は駄目だ、生身は」

「……結局、カレヴィはわたしが生の騎士に会うのが嫌なわけ？」

なんとなく、カレヴィが国とかそういうレベルで言ってる訳じゃなくて、実はまったくの個人的な意見だったように聞こえたので、わたしは彼に突っ込んでみた。

すると、カレヴィは瞳を見開いてから、ちよつとうるたえてた。

「……まあ、そういうこともあるかもしれないな」

なんだ、その曖昧な言い方は。はつきりしないなあ。

でも、庭園から帰ってきたら、早速部屋にガルディアの騎士の本が届けられていて、わたしはカレヴィの行動の早さに思わず舌を巻いた。

なにがいったいカレヴィをそこまでさせるんだ。

せつかくだから読むけど。

……ああそれにしても、生の騎士見たかったなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0653ba/>

王様と喪女

2012年1月9日01時53分発行